

Bible in Japanese.  
1931

# 新契約聖書

挺身舍

主の千九百二十八年四月創刊  
千九百三十二年四月校正

小 引

本書はエフ、スクリプナアによりて、千八百七十二年に出版せられたるロベルトススアハ  
スの第三版を、諸を逐つて直譯せるものであります。

スアハスは千五百四十六年に初版を公にせし後、千五百五十一年までに、四回その版を更  
へました。そのうち千五百五十年の版は、彼の第三版として儼然たるもので、爾來スアハストに至  
るまで大凡四百年間、學者等はこれを基本として、次ぎ次ぎに發見せられたる寫本に照合し、  
各自の信ずるところにとり、そのテツキストを編輯して居ります。即ちそれがチシェンボルフ  
のテツキストであり、グリヌバツムのテツキストであり、若しくはアルフエド若しくはオスト  
レであります。それ故に今日私たちが手にする新契約聖書は、スアハスのテツキストを寫本  
によりて多少修正したもので、結局スアハスたるを失はぬものであります。中にはゾオデッ  
のテツキストの如く、大に趣を異にしたものがありましても、尙ほその基本テツキストは、依  
然スアハスであります。そしてスアハスと他とは文法上修辭上に相違はありましても、そ  
れは大した事はありません。勿論その根幹には聊かの相違もありません。またその原本は今日  
既に世界に稀有の寶物で、東洋人たる私たちに手に、入り難いものとなつて居ります。

小 引

併しスアハスを學び、またそれを仔細に和譯することが、私の研究の主眼ではありません。

小 引

*Handwritten notes:*  
182102  
182102-25-85  
182102-25-85

*Handwritten notes:*  
182102  
182102-25-85  
182102-25-85

私の主眼とする處は、等しくストアヌを基本として、ペギヤエゼとル、ミルヤクリス、ヤン、荷仕その他の多くの學者等を總て、ラハン、ツレケス、チシエンブルフ等の學者に傳はり、遂にエストロトやワイス等よりストアストに落ち込みました、その邊、その修正、またはその變化を一見して明かなる條、一冊のラッキストに歴史的に總括することとした、本書はその基礎であり、またその一部分であります。

次に、本書を譯するに當りまして、他からの誘引または暗示より自由にあるべき必要を認め、執れの表辭をも和譯をも、また支那譯をも參考しました。註釋書も同様です。唯時としてゼロト、アマチス、ペガ、その他二三のラチン譯を見ました。これと必ずしもそれに當ることを致しませんでした。

書中「」は前後の意を明かにするために、譯者の補ひました語で、云はば一種の説明であります。また「」は他の數種のラッキストによりて加へましたもので、ストアヌに於ては或ひは誤脱にはあらざるかと思はれます。また「」は意にペル語に多くありますが、それ引用せられたる聖句の印であります。

譯語は能ふ限り第一義に備ひて有りのままの直譯としました。かく爲すときは原文に近く、また解釋の自由あらしめためには、釋義を用ゐて意譯することを避けました。

また譯語は從來の慣用に循ひますと、律法と替きて『おきて』と翻じ、また行爲と替きて『おこなひ』と讀ましめ、或ひは強て『ほろび』と假名附くるのでありますが、それは甚だ

『おこなひ』と讀ましめ、或ひは強て『ほろび』と假名附くるのでありますが、それは甚だ繁雜となるのみならず、行文に無理を來し、隨て讀み悪くからしむる弊があります。乃ち能ふ限り單語を用ゐました例へば『おきて』には提を添て『ほろび』の名詞なるときは減の一字にて辨せしめ、またそれが動詞なるときは『び』としました。それで可なり多くの熟語も用ゐ

ておりますが、その場合は孰れも訓讀せず、音讀して通せしむるのであります。即ち行爲を『おこなひ』とは訓じません『かうゐ』と音に讀みます。苦痛、畏懼、機會などの類すべて、

『おこなひ』と讀みまして『くらしみ』『めぐみ』『をり』などと訓『くろい』『おんけい』『きくわい』と讀みまして『くろしみ』『めぐみ』『をり』などと訓讀せぬのであります。それらの結果として新しい譯き方を致したものが三あり、例へば

『人ごろし』『みつむる』などの語は、釋人、漢禮、と書きますが普通でありますけれど、それは漢語で、假名を附けねば『人ごろし』『みつむる』とは讀めませぬ。少しく變かは知れま

せんが、人殺、禮儀むると書き直しました。また越人入をば『かりいれび』と讀ましむるた

めには『穉り入れ人』と假名を割り入れ、また御人をば『御き人』と延ばして書き振りを和げ

ました。要するに三特別なる讀み方を要求するもの外は成るべく傍訓なしに讀み得るやう

にどの工夫であります。

また原語の意義に循ひまして、能ふ限り單語に區別を立てました。頗る困難なる仕事であり







# 新契約聖書目次

目次

聖 福 音……………自一頁至三〇六頁

マタイ傳聖福音……………自八七頁

マルコ傳聖福音……………自一四三頁

ルカ傳聖福音……………自三五頁

ヨハネ傳聖福音……………自三〇七頁至三九二頁

聖使徒等の行爲……………自三九三頁至五九五頁

使徒パウロの書狀……………自三九三頁

        ア人に贈れる使徒パウロの書狀……………自三九三頁

        コリント人に贈れる使徒パウロの書狀第一……………自四二九頁

        コリント人に贈れる使徒パウロの書狀第二……………自四六三頁

        ガラチヤ人に贈れる使徒パウロの書狀……………自四八七頁

諸兄の勸誘と、多少は新味を凝むることあり得べき確信とのゆへに、敢て刊行するに至りました。幸に我を離れての聖書の愛讀、また古聖徒たちの信仰の敬慕を感むるの緣となり、また聖書研究の多少の參考となることを得ますれば、誠に喜ばしき次第であります。

主イエスキリストの千九百二十八(昭和三年)一月 日 譯者記す

ヨハネの公同書狀第二……………頁六三三頁

ヨハネの公同書狀第三……………頁六三五頁

ユダの公同書狀……………頁六三七頁

ヨハネの神聖なる黙示……………頁六四一頁至六八一頁

公

同書狀……………頁五九七頁至六三九頁

ヤコブの公同書狀……………頁五九七頁

ペテロの公同書狀第一……………頁六〇七頁

ペテロの公同書狀第二……………頁六一七頁

ヨハネの公同書狀第一……………頁六三三頁

エペソ人に贈れる使徒パウロの書狀……………頁四九頁

ヒリビ人に贈れる使徒パウロの書狀……………頁五一頁

コロサイ人に贈れる使徒パウロの書狀……………頁五二頁

テサロニケ人へ贈れる使徒パウロの書狀第一……………頁五二九頁

テサロニケ人へ贈れる使徒パウロの書狀第二……………頁五三七頁

テモテに贈れる使徒パウロの書狀第一……………頁五四三頁

テモテに贈れる使徒パウロの書狀第二……………頁五五三頁

テトスに贈れる使徒パウロの書狀……………頁五六二頁

ヒレモソに贈れる使徒パウロの書狀……………頁五六七頁

ヘブライ人に贈れる使徒パウロの書狀……………頁五七一頁



# アタノ傳聖福音

## 第一章

アラハムの子、ダビデの子、イエスキリストの系圖の終。ニアラハムはイサカを生めり。またイサカはヤコブを生めり。またヤコブはエタとその兄弟等を生めり。またエタはダサルにてバレスとガラとを生めり。またバレスはエスロムを生めり。またエスロムはアラムを生めり。またアラムはアミナガブを生めり。またアミナガブはナフソクを生めり。またナフソクはサルモンを生めり。またサルモンはラハブにてボアスを生めり。またボアスはルツにてオベデを生めり。またオベデはエツサカを生めり。またエツサカはダビデ王を生めり。またダビデ王はウリアの女性にてソロモンを生めり。セまたリロモンはロボアムを生めり。またロボアムはアビヤを生めり。またアビヤはアサを生めり。ハエツサハはヨサバチを生めり。またヨサバチはヨラムを生めり。またヨラムはオゼアを生めり。またオゼアはヨアタムを生めり。またヨアタムはアハズを生めり。またアハズはエゼキアを生めり。一〇 またエゼキアはツツセを生めり。またツツセはアモンを生めり。またアモンはヨシヤを生めり。二 またバビロンに移さるる時に當りて、ヨシヤはエコニヤトシ



弟等とを定めり。二かくてバビロンに移されし後、エロニアはサラエラを生めり。またサ  
 ラエラはゾロバベルを生めり。三またゾロバベルはサラエラを生めり。またサラエラはエ  
 リアキムを生めり。またエリアキムはサラエラを生めり。四またサラエラはサラエラを生  
 めり。またサラエラはサラエラを生めり。五またサラエラはサラエラを生めり。六またサ  
 ラエラはサラエラを生めり。またサラエラはサラエラを生めり。七またサラエラはサラ  
 エラを生めり。またサラエラはサラエラを生めり。八またサラエラはサラエラを生めり。  
 コフはヨセフ、即ちサラエラの夫を生めり。その「サラエラ」トキリキリトと云はるイエスは生  
 まれ給へるなり。

一七是の故にアラムニアトキリキリトに生るまで、すべて代を離ること「正に」四十代。ま  
 たサラエラトキリキリトに生るまで「正に」四十代。またバビロンに移されてよりキリス  
 トに至るまで「正に」十四代「なり」。

一八またイエスキリストの出生はかくありき。その母マリヤはヨセフに婚約せしが、彼等の  
 一處になるに先立ちて、彼は聖靈にて孕みしことを見出たなり。一九然るにヨセフ、彼の  
 夫は疑しき者なり公に彼を辱しむることを欲せず密かにこれを去りんと思へり。三〇また  
 此等の事を思ひめぐらししとき、見よ、主の使夢にて現はれ、云ひけるは、サラエラの子ヨセフ  
 ト、マリヤ、汝の妻を取ること懼る勿れ、そのその生まるは聖靈にてなればなり。三一  
 また彼は守を産まん、また汝はその名をイエスと呼ばん。それは彼はその民を彼等の罪より救ひ

給ふべければなり。三即ち是れ全く豫言者によりて、主より謂はれしことの成就せらるるた  
 めに産れるなり、云ひ給ひけるは、三見よ、處女がみどり子を産まん、かくてその名をイ  
 エスと呼ぶべし、即ち譯すれば、我等のうちにおはす神なり。四乃ちヨセフは眠より起きて、  
 エルと呼ぶべし、主の使夢に示されば、我等のうちにおはす神なり。五乃ちヨセフは眠より起きて、  
 主の使の言ひ附けし如く爲して、その妻を取りたり。六主は彼を彼の産み  
 しまで、彼を知らざりき。かくて彼はその名をイエスと呼べり。

また「ロマ王の目に、ユダヤのベツレヘムにイエスの生まれ給ひしとき、見  
 よ、博士等東よりベツレヘムに詣りて、ニ云ひけるは、産まれ給へる彼、ユ  
 ダヤの王は何處におはすや。それは我等集にてその星を見れば、彼に奉侍せんために到りた  
 りばなり。三然るに「ロマ王聞きて驚きしめられき、またベツレヘムも彼と共に「なりき」四  
 かくて彼はすべて民の祭司長等及び學者等を集めて、キリストは何處に生まれ給ふべきやと、  
 彼等に尋ねたり。五乃ち彼等いへり、ユダヤのベツレヘムに。それはかく豫言者によりて録され  
 たればなり、六されば、汝ベツレヘム、ユダの地よ、汝はユダの大守のうちにて決して最小さ  
 き者にあらず。そは我が民イスマエラを牧すべき大守、汝より出て来るべければなり。七その  
 とき「ロマ密かに博士等を召して、星の現はれし時を突き留めたり。八かくて彼等をベツレ  
 ムに遣はしていへり、往きて幼児に就きて尋かに扱れ。また見出ださば、我に報せよ、我もそ  
 こに到りて彼に奉侍せんべし。九乃ち彼等は王に聞きて往けり。かくて見よ、東にて彼等が見た

るかの思、彼等を導き、幼児のおはす處の上に到りて止まれり。一〇されば彼等は屈を見て、一方ならず大なる喜もて喜べり。一かくて家に入りしとき、幼児をその母マリアと共に貞田だしたり。されば彼等は伏して彼に平伏し、また寶を開きて黄金また没薬など、禮物を獻けたり。二また彼等は夢にて、ヘロアの許に立ち戻る勿れ、との語を獲りたれば、他の道を経て己が國に立ち退けり。

三また彼等の立ち退きしとき、見よ、主の使夢にてヨセフに現はれ、云ひけるは、起ちて幼児とその母とを携へ、且つエジプトに逃れよ。かくて我が汝にいはんときまでそこにあれ。そはヘロア將に幼児を索めて亡ぼさんとすればなり。二乃ち彼は起ちて夜に乘じ、幼児とその母とを携へてエジプトに立ち退けり。一五かくてヘロアの生の終まで彼處にありき。是れ漢言者によりて、主より語はれしことの成就せらるためなりしなり、云ひ給ひけるは、我エジプトより我が子を呼べり。六そのときヘロア、博士等に欺かれたることを見て、甚だ悲れり。乃ち「人を」使はして博士等に突き留めたるころの時に稱ひて、ベツレヘムとその境のうちに、二歳またそれ以下の子供をすべて殺したり。一七そのとき豫言者エレミヤより語はれしことを成就せられき、云ひけるは、一八大なる哭と悲の聲、ラマにて聞えたり。ラケルその思等のために歎きて慰めらるを欲せざりき、又は彼等のあざざりしが故なり。一九かくてヘロアの終りければ、且主の使エジプトにて夢にてヨセフに現はれ、三〇云ひけるは、起ちて

幼児とその母とを携へ、且つイスマエルの地に往け。そは幼児の魂を索めつつありし人々は死

にたればなり。二乃ち彼は起ちて幼児とその母とを携へて、イスマエルの地に入り來れり。

第三章  
またそれらの目にバプテスマのヨハネ語り、ユダヤの荒野にて宣へて、三云

ひけるは、悔ひ改めよ、そは天國は近づきたればなり。三そは此の者は豫言者イザヤより語はれたる者なればなり、云ひけるは、荒野に於ける叫びの聲あり、主の道を備へよ、その途筋を直ぐ爲せ。四また彼ヨハネは駱駝の毛の衣を着け、また皮の帯をその腰に巻けり。またその食物は蝗と野薺なりき。

五そのときエロコルマ、またすべてユダヤ、またすべてヨルダンの<sup>諸</sup>の地方の人々、彼の許に出で往き、六且つその罪を告白しつ、ヨルダンにて彼よりバプテスマせられたり。七されど彼はそのバプテスマのために、來れる多くのバプテスマに非どカナイの人々を見て、彼等にいへり、曩の猶よ、誰が汝等に来らんとする怒より逃ることを示しよ。八是の故に悔ひ改に値する寶を出だせ。九また汝等己自らのうちに、我等は父にアナムありと云はんと思ふ勿

ち。そはわれ汝等に云はん、神は此等の石より、アフラハムのために星等を起し給よことを得べければなり。一〇されど既に衆も群の抵に對ひて置かる。是の故にすべて良き實を用ださざる樹は伐り倒され、且つ火に投げ入れられん。二我は如何にも悔ひ敢に至るべく、水にて汝等をアフラハム、されど我に後れて來り給ふ彼は、我より能ある者におはします。我はその人の鞋を擲ぐるにも足りざる者なり。彼は煙燄と火にて汝等をアフラハムし給ふべし。三彼はその手に杖を、掃ちて、その床を源めん。かくてその髮を集めて倉に納れ、また穀をば穂えざる火にて燃きつくし給ふべし。

三 そのときイエス彼よりアフラハムをせらるれんとて、ガリラヤよりヨルダンに、ヨハネの許に詣り給ふ。一四然るにヨハネ避きりて、云ひけるは、われは汝よりアフラハムをせらるるの要あり。然るに汝は我が許に來り給ふや。一五されどイエス彼に對ひ答へて曰へり、今は許せ。汝はかくすべての穢しき罪を成就するは我等に適へることなればなり。そのとき彼は許せり。一六かくてイエスはアフラハムをせられて直に水より上り給へり。また見よ、天開きたり。かくて彼は神の靈の鶴の如く降り、且つ己が上に來り給ふを見給へり。一七また見よ、天よりの聲「あり」云ひ給ひけるは、此の者は我が子、愛せしむる者なり、彼に於てわれ悦を得たり。

第四章

そのときイエス惡魔より試みらるべく、荒野にまで遠に連れ往かれ給へり。一八かくて四十日と四十夜斷食し給ひて、後に飢ゑ給へり。一九また試むる者彼

に進入來りていへり、汝もし神の子ならば、此等の石の、パンになるやうい。四然るに彼答へて曰へり、人「たる者」はパンのみにて生くべからず、されど神の口より出で往くすべての詞にて「生くべし」と練されたり。五そのとき惡魔、彼を聖き市に拂へ「往き」、且つ彼を神殿の頂端に置けり。六かくて彼に云ふ、汝もし神の子ならば、汝自身を投げ落せ。そは彼は汝に就きてその使等に命じ給はん、されば汝の足を石に衝き當つることなからんために、彼等は手のにて汝を交ふべし、と練されたればなり。七イエス彼に述べ給へり、主、汝の神を試むべからず、と復た練されたり。八復た惡魔、彼を甚だ高き山に拂へ「往けり」。かくて此の世のすべて國々とその祭先とを彼に見はし、九且つ彼に云ふ、汝もし伏して我に平伏せば、われ此等をすべて汝に與へん。一〇そのときイエス彼に云ひ給ふ、往け、サタナ。そは主、汝の神を拜し、且つ唯彼にのみ服事すべし、と練されたればなり。一一そのとき惡魔彼を棄つ。また見よ、天使等進み來りて彼に事へたり。

二 三またイエスはヨハネの付されしことを聞き給ひしとき、ガリラヤに立ち退き給へり。二四これ豫言者イザヤによりて謂はれしことの成就せしむるためなり、云ひ給へり、一五ヨルダンの向側、海の遠なるゼアルベの地、またアフラハムの地、(即ち)國人のガリラヤ、一六暗に坐する民は大なる光を見、また死の地と死の蔭に坐する彼等に光界れり。



一七 われ提びは豫言者を辱すために到れりと思ふ勿れ。辱すためにあらず、されど成獄するためなり。一八 それは誠におれ汝等に云はん、天と地との過ぎ去るまでに盡く成らずして、一點或るひは一畫も必ず汝より過ぎ去ることなかるべければなり。一九 母の故に誰にて此等の誠のいと小さき一つを破り、またその如く人に人を教へん者は、天國に於ていと小さき一畫と呼ばれん。されどこれを爲し、且つ教へん者、此の者は天國に於て大なる者と呼ばるべし。二〇 それはわれ汝等に云はん、學者等またパリサイの人々の「義」より汝等の義の勝らずば、必ず天國に入り來らざるべければなり。

二三 殺す勿れ、誰にても殺す者は獄に當るべし、と古の人に對ひて謂はれしことを汝等聞けり。二三 されど我は汝等に云はん、すべて輕ろ輕ろしその兄弟を怒る者は我に當るべし。また誰にてもその兄弟に對ひて、罵者よ、といはん者は議會に當るべし、また誰にても、姪者、

といはん者は火のグーナにまで當るべし。二三 是の故に汝もし汝の供へ物を祭壇に獻げんとし、汝の兄弟の汝に逆らひ、何事をかもつことを、そこにて憶ひ出でなば、<sup>二四</sup> その供へ物をそこに、祭壇の前に差しおき、住きて先づその兄弟に和順したる「後」、到りて汝の供へ物を獻げよ。二五 汝を訴ふる者と共に逆にあるうちに、速にこれと和解せよ。然らざるは訴ふる者は汝を殺し人に付し、裁き人は汝を便丁に付し、かくて議會に汝は投げ入れられん。二六 だわれ汝に云はん、最終のゴトラントをも償ふまで、必ず汝は彼處より出で來ざるべし。二七

姪を犯す勿れ、と古の人に對ひて謂はれしことを汝等聞けり。二八 されど我は汝等に云はん、すべて情慾のために姪を視る者は既に於て彼と姪を犯せるなり。二九 さればもし右なる汝の目を踏かしめなば、汝よりこれを振り出だして投げよ。そは汝の股の一つを亡ぼして、燈を全くグーナに投げ入れられざるは、汝のために益なればなり。三〇 またもし汝の右の手を踏かしめなば、汝より切り放ちて投げよ。そは汝の股の一つを亡ぼして、燈を全くグーナに投げ入れられざるは、汝のために益なればなり。三〇

三二 また誰にてもその妻を去らんとせば、これに去り狀を與ふべし、と謂はれたり。三三 されど我は汝等に云はん、すべて淫行の故なりで、その妻を去る者は、これに姪を犯さしむるなり。また去られたる彼を娶る者も姪を犯すなり。三四 復た倒り誓ふ勿れ、汝の誓を主に果すべし、と古の人に對ひて謂はれしことを汝等聞けり。三五 されど我は汝等に云はん、全く誓ふ勿れ。天をもても「誓ふ」勿れ、是れ神の位なるが故なり。三六 また地をもても「誓ふ」勿れ、是れ彼の足の足跡なるが故なり。エロルマをもても「誓ふ」勿れ、是れ大王の市なるが故なり。三七 また汝の頭をもても誓ふべからず、そは一筋の髮をも、汝は白くたし、或ひは黒くすること能ざるが故なり。三八 されば汝等の言は、然り然り、否否たるべし。これより過ぐるは惡より「出づる」なり。三九 目には目を、また齒には齒を、と謂はれしことを汝等聞けり。四〇 されど我は汝等に云はん、惡に逆らふ勿れ、されど誰か汝の右の頬に於て汝を平手打ち

ちば、せ、他「の類」をもこれに向けよ。四 また汝を誑へてその下衣を取らんと欲する者は、上衣をも彼に委せよ。一 また誰か汝を強ひて一里往かしめなば、これと共に二里」往け。三 汝に求むる者には與へよ。また汝より借らんと欲する者を拒むべからず。四 汝の隣人を愛し、また汝の敵を憎むべし、と謂はれしことを汝等聞けり。五 さてと我は汝等に云はん、汝の敵を愛し、汝を憎む者を良く爲し、汝を鞭しめまた汝を迫害する者のために祈るべし。六 此天に「おはす」汝の父の子と汝等のならんためなり。そは彼はその腸を悪しき者の上にも、また善き者の「上にも」昇らしめ給ひ、また義しき者と義しかざらざる者との上に雨らしめ給ふ。七 汝等もし己を愛する者を愛するとも、何等の報あらんや。關切人等も同じき事を爲さざるか。八 また汝等もし己が兄弟等にもみ挨拶するとも、何の酬れんことを爲すとせんや。關切人等もかく爲さるか。九 是の故に天に「おはす」汝等の父の完きが如く、汝等も完き者たるべし。

第六章

然らずば、天におはす汝等の父の前に報を得し、是の故に汝、施を爲すときは、人々より頌めらるるために、會堂また街に於て、僞善者等の爲す如く、己が前にて喇叭を鳴らす勿れ。誠におれ汝等に云はん、彼等ははその報を得たり。三 さてと汝、施を爲すと き、汝の右の手の爲すことを、左の手に知らしむる勿れ。四 是れ汝の施の隠るためなり。さ

らば隠れたるに視給ふ汝の父は、顯に汝に酬い給ふべし。五 また汝祈るとき、僞善者等の如くあるべからず、そは彼等は人に顯はるるために、會堂また大路の角に立ちて祈ることを好めばなり。誠におれ汝等に云はん、彼等ははその報を得たり。六 さてと汝祈るときは、汝の部屋に入 り來り、且つ戸を鍵して、隠れたるに「おはす」汝の父に祈れ。されば隠れたるに視給ふ汝の父は、顯に酬い給ふべし。七 また汝等祈るときは、異邦人の如く空しき聲を返し聲をなす勿 れ。そは彼等は言多ければ聞き入れらるるならんと思へばなり。八 是の故に彼等に等しからざ り。九 是の故に汝等の父は、汝等の求むるに先んじて、汝等が要するものを知り給へばなり。一〇 御國を 故に汝等はかく祈れ。天に「おはす」我等の父よ、御名の理められ給はんことを。一〇 御國を 來らしめ給へ。御意の天に於ける如く、地の上にもならしめ給へ。二 我等のパン、無くしてな らぬ物を、今日我等に與へ給へ。三 また我等の僕人に我等も教すも教すも故に、我等の僕を我等に 教し給へ。三 また我等を誠のうちに導き給はず、されど惡より我等を援ひ出だし給へ。そ は爾と力と榮光とは、來に汝のものなればなり。アメン。四 是は汝等もし人にその曲事を敵 せば、天なる汝等の父は汝等にも敵し給ふべければなり。五 さてと汝等もし人にその曲事を 敵すば、汝等の父も汝等の曲事を敵し給はざるべし。六 また汝等斷食するとき、僞善者等 の如く盛りがちな唇子になる勿れ。そは彼等は斷食することの人に顯はるやう、その頸を 耳苦しうすればなり。誠におれ汝等に云はん、彼等ははその報を得たり。七 さてと汝等斷食する



ときは、汝の頭に油ぬり、且つ頭を洗へ。二是れ汝の脚食すること、人に顯はれずして、反つて隠れたるに「おはする」ためなり。されば隠れたるに顯給ふ汝の父は願に汝に開い給ふべし。

一汝等のために「罪と病との掛ふところ」、また盗人の穿ちて空む處なる地に、財を蓄ふる勿

れ。三「されど汝等のため、蓋も腐も損はざる處、且つ盗人も穿たず、また盜まざる處の天に

財を蓄へよ。三是れ汝等の財のある處、そこに汝等の心も在るべければなり。三體の燈火

は自なり。是の故に汝の目もし燈かたならば、汝の體は全く明たらん。三「されど汝の目もし惡

しからば、汝の體は全く闇たるべし。是の故に汝のうちの光もし暗からば、その暗は如何ばか

りぞや。三「誰も二手に燈燭たること指はず。そは或ひは一を借み、また他を愛し、或ひは一

を重んじ、また他を輕んずべければなり。汝等神と「モツ」とに奴隷たること指はず。三「此の

ゆへにわれ汝等に云はん、汝等の魂のために何を喰ひ、また何を飲み、また體のために何を着

るべきかと心遣ひする勿れ。魂は食物より勝り、また體は衣より「勝る」にあらずや。二「空

の鳥をつらつら視よ、彼等は捕かず、また獲らず、また籠に収むることもなし。然るに天なる

汝等の父はこれれを養ひ給ふ。汝等はこれより優るにあらざるや。三「されど汝等のうち誰か心

遣ひして、その身に寸分をも加ふることを得るや。二「また衣に履きて汝等何ぞ心遣ひする

や。野の百合は如何にして青つかをつらつら思へ。彼等は勞せずまた紡かず。二「されどわれ

汝等に云はん、その榮先の體に於けるプロモツさへ、此等のうちの一つ程に裝はれざりきと。

三「されどもし神は今日ありて、明日は體に投げ入れらる野の草をもかく裝ひ給はば、汝等

は尙ほ勝らざるや、信仰小ききよ。三「是の故に我等は何を喰ひ、或ひは何を飲み、或ひは何

をもて纏はるべきや、と云ひつつ心遣ひする勿れ。三「是の故に汝等のものを國人は索むれ

ばなり。そは天なる汝等の父は汝等がすべて此等のもの、無くてならぬことを知り給へばな

り。三「されど汝等先づ神の國と彼の義とを崇めよ。されば此等の物はみな汝等に加へらるべ

し。四「是の故に明日のために心遣ひする勿れ。そは明日は「明日」自ら已汝等を心遣ひすべ

ければなり。その勞苦はその日のために不足なし。

七「裁く勿れ、是れ汝等の裁かれざるためなり。二「是れ汝等の裁く裁にて汝

等は裁かれ、また汝等の惡の裏にて衆り返さるべければなり。三「また兄弟の

目に「在る」ところの塵を視て、汝の目に「塵」を認めざるは何ぞや。四「或ひは汝の兄弟に、汝の

目より塵を取り去ることを許せ、と汝は如何にして罰ふべきや。即ち是れ、梁は汝の目に「在

り」五「僞善者よ、先づ汝の目より梁を取れ。さればそのとき汝の兄弟の目より塵を取り去るべ

く、明かに視るべし。六「大に聖なるものを與ふる勿れ。また隊の前に汝等の眞珠を投ぐる勿

れ。恐らくは彼等これをその足にて踏みつけ、より返りて汝等を裂かん。七「求めよ、されば汝

等に與へられん。禁ねよ、されば見出ださん。即ちよ、されば汝等に開かれん。八「是れすて

第七章

七「裁く勿れ、是れ汝等の裁かれざるためなり。二「是れ汝等の裁く裁にて汝

等は裁かれ、また汝等の惡の裏にて衆り返さるべければなり。三「また兄弟の

目に「在る」ところの塵を視て、汝の目に「塵」を認めざるは何ぞや。四「或ひは汝の兄弟に、汝の

目より塵を取り去ることを許せ、と汝は如何にして罰ふべきや。即ち是れ、梁は汝の目に「在

り」五「僞善者よ、先づ汝の目より梁を取れ。さればそのとき汝の兄弟の目より塵を取り去るべ

く、明かに視るべし。六「大に聖なるものを與ふる勿れ。また隊の前に汝等の眞珠を投ぐる勿

れ。恐らくは彼等これをその足にて踏みつけ、より返りて汝等を裂かん。七「求めよ、されば汝

等に與へられん。禁ねよ、されば見出ださん。即ちよ、されば汝等に開かれん。八「是れすて

求むる者は受け、また熟る者は見出し、また叫ぶ者は聞かすべければなり。九或ひは汝等のうち何人か、その子もパンを求めんに、石をこれに渡す者あるんや。一〇またもし魚を求めんに、蛇をこれに渡さんや。一 是の故にもし汝等は惡しき者たりとも、善き眼帯を汝等の兄弟に與ふことを知る。況して天に「おはす」汝等の父をや。求むる者に善き物を與へ給ふべし。二 是の故にすべて何にても、人の汝等に爲さんことを汝等が欲することば、汝等も彼等にその如く爲す。そは此の者は蛇なりまた蠱言者なればなり。

一 三 旗き門より入り來れ。そは誠に蕩く門は廣く、またその道は大にして、それより入り來る者多ければなり。一四 所は生に導く門は狭く、またその道は細くして、それを見出だす者少なければなり。一五 また蠱言者等に心せよ。彼等は羊の衣にて汝等の許に來れども、内は蠱言者を知らぬ狼なり。一六 汝等はその實にて彼等を知るべし。誰か夫より葡萄を、或ひは蘋果より無花果を摘み取らんや。一七 かくの如くすべて善き樹は良き實を出だせども、惡しき樹は惡しき實を出だすべし。一八 善き樹は惡しき實を出だし、また惡しき樹は良き實を出だすことと能はず。一九 すべて良き實を出ださざる樹は伐り倒され、且つ火に投げ入れらるなり。二〇 果して然らば、その實にて汝等は彼等を辨かに知るべし。

一 三 主よ、主よ、と我に云ふ者すべて、天國に入り來るにあらず。されど天に「おはす」我が父の意を爲す者なり。二一 かの日に多くの者われに、主よ、主よ我等は汝の名のために豫言

し、また汝の名のために惡鬼を逐ひ出し、また汝の名のために多くの力ある行を爲しにあらずや、と謂ふらん。二三 されどそのときわれ彼等に告ぐならん、われ決して汝等を知らず、不法を行ふ者よ、汝等われより退き去れと。二四 是の故にすべて此等の我が言を聞き、これを爲す者は、我これを岩の上に家を建てたる情き人に比すべし。二五 即ち雨降れり。さらば、汝等は沙の上にその家を建てたる、愚なる人に比せらるべし。二七 即ち雨降れり。また流し、到れり。また風吹けり。かくてかの家に倒き當たり。乃ち倒れたり。且つその額は大なりき。二八 かくてイエスの此等の言を終り給ひしときかありき。諸雅衆その教に驚かされき。二九 そは彼等を教へ給ふに權をもつ「君の」如くにして、學者等の如くにおはさざりければなり。

かくて彼の山より下り來り給ひしとき、多くの群衆彼に従へり。三〇 また見よ「一人」癩病者來りて彼に平伏し、云ひけるは、主よ、汝もし煩とし給はば、我を淨むることを能くし給ふ。三 さればイエス手を伸べ、彼に擗りて云ひ給ひけるは、好し、淨まれど。乃ち直に彼の癩病淨まれり。四 かくてイエス彼に云ひ給ふ、觀よ、誰にもじよ勿れ。されど往け。汝自身を祭司に見はせ、且つ彼等に證しのため、モラセの言ひ付けし件、物を除けよ。

第八章



くの豚の群飼はれてありき。三 然るに惡鬼ども從に乞ふて、云ひけるは、汝もし我等を逐ひ出だし給はば、かの豚の群のうちに入りて、往け。乃ち彼等出て来てりて豚の群のうちに入りて、往け。乃ち彼等出て来てりて、海に跳び入り、且つ水にて死ぬなり。三 然るに飼ふ者等逃げ、且つ市に去り往き、すべての事と惡鬼に憑かれし者の事とを報じたり。四 されば見よ、市に去りてイエスに出で會はんとて來れり。かくて彼を見て、彼等の處より移り給はんことを彼等は乞へり。

第九章

また彼は船に乗り、渡りて己の市に歸り給へり。二 かくて見よ、人々市に臥したる中風の者を擔ひ來れり。乃ちイエス彼等の信仰を見て、中風の者に曰へり、見よ、男よ、此の者は汝に敵されたり。三 然るに見よ、學者等の成る者巴里のうちにいへり、此の者は冒す。四 然るにイエスその思を見て曰へり、何故に汝等はその心のうちに惡を思ふや。五 罪は汝に敵されたり、といふと、或ひは、起ちて歩め、といふと執事易きや。六 されど人の子は地にて、罪を敵すの權あることを汝等の知るために、そのとき中風の者に云ひ給ふ、起きて汝の床を取り上げよ、且つ汝の家に往け。七 乃ち起ちて彼は己が家にと去れり。八 されば隣隣業てこれを見て驚けり。かくてかかる權を人に與へ給ひし神を頌めたり。九 またイエスは彼處よりの途すがら、關稅所に坐するマタイと云ふ人を見給へり。かくて彼に云ひ給ふ、我に従へ。乃ち起ちて彼に従へり。一〇 かくてかの家にて彼の席に着き給ふこと

ありき。然るに見よ、多くの關稅人並に罪人等來りて、イエス及び弟子等と同に船に乗り入り。二 さればパリサイの人々見て、弟子等にいへり、何すれば汝等の師は關稅人並に罪人どもと共に食するや。三 然るにイエス聞きて彼等に曰へり、汝等なる者は醫士の要あらず、されど權ある者は「その要」あり。三 されば往きて、われ等を欲して靴鞋を「欲せず、とは何「の意」なるかを學べ。そは我は義しき者を召すために來れるにあらず、されど罪人を悔ひ改に導らしめんと欲したるはばなり。

一四 そのときヨハネの弟子等彼に追み來りて、云ひけるは、何すれば我等及びパリサイの人々は斷々斷食するに、汝の弟子等は斷食せざるや。一五 乃ちイエス彼等に曰へり。婦人の席に在る子等は花籃の彼等と共に在るうち、誰しむことを得んや。されど花籃の彼等より奪ひ去らるる目刺らん、さればそのとき彼等は斷食するならん。一六 また仕立てしことなき切れ地の繒を、古き衣に置く者はなし。そはその補ひしものは衣より「布を」取り去りて、裂け目は尙ほ惡しくなればなり。一七 また彼等は新しき葡萄酒を古き皮に入らず。されどもし然らずば皮は破れ、また葡萄酒も流れ出づ。かくて皮も廢るべし。されど新しき皮に新しき葡萄酒を入れん、かくて又つながら睡らるるなり。

一八 彼の此等の事を語たりておはししとき、見よ、一人の長來り彼に平伏し、云ひけるは、我が娘は只今死ねり。されど來りて汝の手を彼の上に按ぎ給はば、生くべし。一九 乃ち

エテ起ちて弟子等と彼に從ひ給へり。

三〇 また見よ、十二年血漏を患へる婦、後ろに進み來りて、彼の衣の襟に捫れり。三

一 彼は己自らのうちに、我もし唯彼の衣にだに捫らんには、救はるるならん、と云ひたればな

り。三 然るにイエスより返り、且つ彼を見て曰へり、勇ましかれ、娘よ。汝の信仰汝を救へ

り。乃ち婦はその時より救はられたり。三 かくてイエスは畏の家に來り給ひて、俯伏く者、ま

た立ち曠く群衆を見て、三 彼等に云ひ給ふ、退け。是は小女は死にたるにあらざればなり。

されど寢ぬるなり。乃ち彼等は嘲笑へり。三 然るに群衆の出だされしとき、彼は入り來りて

その手を握へ給ひければ、少女は起きたり。三 かくて此の衆、驚くかの地に由て來れり。

二 九 またイエスの彼處より進み給ひしとき、二人の盲者從ひて來りて叫び且つ云ひける

は、我等を憐み給へ、ダビデの子よ。三 かくて家に到り給ひしとき、かの盲者等彼の許に通

か來りければ、イエス彼等に云ひ給ふ、汝等は何のこれ爲すことを得ると信ずるや。彼等云

ふ、然り、主よ。三 五 そのとき彼等の目に捫りて、云ひ給ひけるは、汝等の信仰に循ひて、そ

のこと汝等になれ。三 乃ち彼等の目開けり。かくてイエス驚しく彼等に命じて、云ひ給ひ

けるは、觀よ、誰にも知らしむる勿れ。三 然るに彼等は出で來りて、過くかの地に云ひ觸ら

せり。

三 一 また彼等の出で往きしとき、見よ、人々惡鬼に逐かれたる啞の人を彼の許に連れ來れ

り。三 かくて惡鬼逐ひ出だされて、啞者は語たれり。されば諸群衆、驚き、云ひけるは、未

だ曾てかかる〔事〕はイサエルのうちに現はれしことなし。三 然るにパリサイの人々云へ

り、彼は惡鬼の長もて惡鬼を逐ひ出だす〔なり〕。

三 二 またイエス彼等の會堂にて教へ給ひつ、また陶の扁擔を直へ給ひつ、また民のうち

なるすべての疾、またすべての癩を癒し給ひつ、すべての雨々また村々を解めり給へり。

三 三 また彼は諸群衆を見て、不便に思ひ給へり。そは彼等は牧者をもたざる羊の如く、救は

つ散り散りなりし故なり。三 四 そのとき弟子等に云ひ給ふ、如何にも従り入は多し、されど働

人は少なし。三 五 是の故に働き人を従り入れ場に、曳き出だし給はんことを、従り入の主に祈

願せよ。

第十章

かくてイエス、十二弟子を召して、不淨なる靈を制してこれを逐ひ出だし、

またすべての疾、またすべての癩を癒す權を與へ給へり。ニ 一 また十二使の

名は此等なり。先づペテロと云はる者なるシモンとその兄弟なるアンデレ、〔また〕ゼベダイ

の〔子〕なるヤコブとその兄弟なるヨハネ、三 〔また〕ヒリヤとバルトロマイ〔また〕トマス

と關提人なるマタイ〔また〕アルバイの〔子〕なるヤコブとタツガイと稱へられし者なるレフ

バイ、四 〔また〕カナソ人なるシモンと彼を付せし者なるイスカリオテのユダ。

五 一 一 此等の十二を使はし、彼等に命じて云ひ給ひけるは、國人の道に去る勿れ、またサマ

リヤ人の市に入り来る勿れ。六 されど反つてオスマエルの家の、失せたる羊の群に在け。セ即ち往きて、天國は近づけり、と云ひつゝ宣へ。八 病める者を癒せ、癩病の者を淨め、九、死人を起せ、聖霊を逐ひ出せよ。汝等價なしに受けたれば、價なしに與へよ。九 汝等帯に金子をもち、また鞋をも、また杖をも用意する勿れ。一〇 旅路のために糧食をも、また二つの下衣をも、また紐をも、また杖をも用盡す勿れ。一 勿れ。それは働き人はその食物の價あればなり。一 またいづれの市、或ひは村にても入り來れ、そのうちの値ある者を攫ぐれ。また出で來るまでそこに連れ。三 また家に入り來るとき、これに挨拶せよ。三 かくてその家もし如何にも植せば、汝等の平和はその上に到るべし。されどもし使せずば、汝等の平和は汝等の許に歸るべし。一四 また誰も汝等を受けず、また汝等の言を聞かざらんには、その家或ひはその市を出で來るとき、汝等の足の塵を振り拂へ。一五 誠にわれ汝等に云はん、裁の目にはソドムとゴマラの地は、その市より尙ほ耐へ易からん。

一六 且ん、われ汝等を使はさん、狼の國中にある羊の如し。是の故に蛇の如く怖き者、また鶴の如く説なる者たれと。一七 また人に心せよ。それは汝等を議會に付し、また汝等を會堂にて驅つべければなり。一八 また汝等われの故に、太守等及び王等の前にも以かるべし、彼等と國人とに隣するためなり。一九 されど人々汝等を付すとき、如何にまた何を語らるべきかと心に遣ひする勿れ。それはの時語たるべきことば汝等に與へらるべければなり。二〇 是は語たる者

は汝等におらず、されど汝等のうちに「おはして」語たり給ふ汝等の父の靈「におはせば」なり。二 されど兄弟は兄弟を死に付し、また父は兒を付さん。かくて兒等は父親に逆らひて起ち上り、これを屍罪に處するならん。三 また汝等は我が名のゆゑにすべての者より憎まるならん。されど終まで耐へ忍ぶ者、此の者は救はるべし。三 されば人々此の罪にて汝等を迫害するときは、他「の市」に遁れよ。それは誠にわれ汝等に云はん、必ず汝等は人の子の到るまで、オスマエルの市々を「巡り」終らざるべければなり。三 弟子は能に勝らず、また奴隷はその主に。三 弟子はその師の如く、また奴隷はその主の如くならば足る。もし家の主人をベルセブルと呼ばば、況してその家の者をや。三 是の故に彼等を懼る勿れ。それは彼はれて現はれざるものなく、また隠れて知れざるものなければなり。三 闇のうちにて我が汝等に云ふことを、光のうちにいへ、また汝等耳のうちにて聞くことを、屋の上にて宣へよ。二六 また汝等は體を殺して、魂を殺すこと能はざる者より懼る勿れ。されど反つて魂をも體をも、汝等は體を殺して、魂を殺すこと能はざる者を懼れよ。二九 二つの瘡は一錠にて買ふにあらずや。然るに汝等の父の「許」なくしては、その一つも地に落つることなし。三〇 また汝等の頭の髮さへみな數へらるるなり。三一 是の故に懼る勿れ。汝等は多くの瘡より懼るるなり。三二 是の故にすべて我を人々の前にて告白する者、彼をば我も天に「おはす」我が父の前にて告白すべし。三三 されど誰にても人々の前にて我を否む者、彼をば我も天に「おはす」我が父の前にて否むべし。三四

われ地に平和を出すために到れりと思ふ勿れ。平和を出すためにあらず、されど劍を一田  
 だすために到れり。三、そは我は人をその父に逆らひ、また娘をその母に逆らひ、また娘を  
 その父に逆らひて分れしむるために到りたればなり。三、即ち人の敵はその家の者なり。  
 三、我に勝りて父或ひは母を敵にする者は我に値せざる者なり。また我に勝りて子或ひは娘を  
 敵にする者は我に値せざるものなり。三、また己の十字架を取らずして、我が従ふ者  
 我に値せざる者なり。三、己が魂を見出したる者はこれを失ふべし、また我がために己が魂  
 を失へる者はこれを見出だすべし。四、汝等を受くる者は我を受く。また我を受くる者は我を  
 使はし給ひし者を受く、一、豫言者の名に於て豫言者を受くる者は豫言者の報を受く。また義  
 しき者の名に於て義しき者を受くる者は義しき者の報を受く。三、また誰にても弟子の名に於  
 て健かに冷かなる「水」一杯を、此等の小き者の「一人」に飲ましむる者は、誠にわれ汝等  
 に云はん、必ずその報を失はざるべし。

第十一章

かくてイエスの十二弟子に譲すことを終り給ひしときかくありき、彼等の市  
 市にて教へまた宣ふるために彼處より移り給へり。  
 二、またヨハネ狼屋のうちにてキリストの行を聞き、二人の弟子等を遣はして、三、彼にい  
 へり、汝は来り給ふ者なるや、或ひは我餘他の者を得つべきか。四、さればイエス答へて彼等に  
 曰へり、往きて汝等の聞くとこゝろ、また視るべしとこゝろをヨハネに報ぜよ。五、首者は脚力を受

げ、また跛者は歩み、癩病の者は淨められ、また聾者は聞き、死人は起され、また貧しき者は福  
 音を宣傳へらる。六、されは誰にても我に願ひせざる者は福なる者なり。七、かくて此等の者の  
 往きしとき、イエス諸群衆にヨハネに就きて云ひ始め給へり。汝等何を看んとて荒野に出で來  
 りしや。風に揺らる葉なるか。八、されど何を見んとて出で來りしや。葉なる衣にて覆はる  
 人なるか。九、葉なる衣を脱ぎたる者は主の家にあり。九、されど汝等は何を見んとて出  
 來りしや。豫言者なるか、然り、われ汝等に言はん、豫言者より何は勝れる者を「見んとてな  
 り」一〇、そは此の者は、見よ、われ汝の顔の前に我が使を便はさん、彼は汝に先立ちて、汝の  
 道を備へんとす、と録されたる者なればなり。一、誠にわれ汝等に云はん、婦の生める者のう  
 ちにバテスマのヨハネより大なる者は起はざりき。されど天國に於ける故小き者は、彼よ  
 りも尙大なり。二、されどバテスマのヨハネの日より今に至るまで、天國は烈しく攻めら  
 る、また烈しく攻むる者はこれを奪ひ去る。三、そはすべての豫言者等と捉との豫言したるは  
 ヨハネまでなればなり。四、されば汝等もし受けんと欲せば、彼は來らんとするエリヤなり。  
 五、聞くべし、耳をもつ者は何に聞けし。六、されどわれ此の代を何に等しうすべきや。市墟に坐  
 し、且つその尙を唾ひて、七、汝等のために我箏笛吹きたれども汝等踊らず、また汝等のため  
 に我等悲しみたれども汝等闘打たざりき、と云ふ輩等に等しきなり。八、そはヨハネ到りて食  
 せずまた飲まざれば、彼は惡鬼に憑かる。と彼等は云ひ、九、人の子到りて食しました飲むとき

は、則ち、見よ、金を食ひ酒を嗜む人、鬻人また罪人どもの友と、彼等云へばなり。されど智慧はその見等に義とせられたり。三〇 そのとき彼は多くの力ある行の發りし市々を非難し始め給へり。それは彼等の悔ひ改めざりしが故なり。三二 彼は溺なるかな、コラヂンよ。彼は溺なるかな、ベネチア人よ。彼は汝等のうちに發りし力ある行の、もしツロとシプロンにて發りしならんには、彼等は埃くに塵と灰とにて悔ひ改められたればなり。三三 それどわれ汝等に云はん、載の目には汝等のためより、ツロとシプロンのためには何ほ溺へ易かるべし。汝、天にまで擧げられたるカエナカムよ、汝は陰府に下されたるならん。それは汝のうちに發りし力ある行の、もしツロとシプロンにて發りしならんには、今日に至るまで存したればなり。三四 それどわれ汝等に云はん、載の目には汝等のためより、ツロとシプロンの地のためには何ほ溺へ易かるべし。

三五 その期にイエス答へて曰へり、父よ、天と地との主よ、われ汝に感謝しまつる、それは汝は此等の事を智者と識者として隠して、小兒等に黙示し給ひたればなり。三六 然り父よ、それは此の如きは汝の前に悦とし給ひしが故なり。三七 すてのものは我が父より我に授けられたり。また父の外に子を無かに知る者なく、また子及び子の黙示する者欲する者の外に、誰も父を無かに知らず。三八 すてに發する者、また重荷を負へる者は我が許に來れ、さればわれ汝等を休ましめん。三九 我は心楽に且つ卑くければ、汝等わが轡を負ひて我に學べ、されば汝等その魂

第十二章

のために休を得べし。三〇 それは我が轡は易く、また我が荷は輕ければなり。その期にイエス安息日に餐室を經て往き給へり。然るに弟子等覺えたり。されば種を講み且つ喚び始めたなり。三二 然るにパリサイの人々彼にいへり、見よ、汝の弟子等は安息日に律しからざることを爲しつあり。三三 然るに彼曰へり、汝等は又と云ふ、汝が從及び共に來たる人々の飢えしとき、爲ししことを諷まざるか。三四 彼は神の家に入り來り、且つ獨り祭司等の外は、彼のためにも、また彼と共に來たる人々のためにも、啖ふは律しからざる供のパンを啖ひしは如何にぞや。三五 或ひは汝等は安息日に祭司等は、神殿にて安息日を汚すとも、咎なき者なることを挺にて諷まざるか。\*さればわれ汝等に云はん、神殿より大なる者此處にあり。七また汝等もし我は愚を欲して機嫌を欲せずとは、何の意なるかを知りしならば、咎なき者を罪に定めざりしものを。八それは人の子はまた安息日の主なればなり。九またそこより移りて、彼は彼等の會堂に到り給へり。一〇 また見よ、裝へたる手をもつ人ありき。されば人々彼に問ふて云ひけるは、安息日に纏ふことは律しきや否や。是れ彼を誦ぶるためなり。一一 然るに彼は彼等に曰へり、汝等のうちに何人かあるん、彼は羊一つをもたんと。かくて此の「羊」もし安息日に穴に陥らば、それを拘へて掲げざるならんか。三三 是の故に人は羊より儼ること如何ばかりぞや。されば安息日に良きを爲すは律し。三三 そのときかの人に云ひ給ふ、汝の手を伸べよ。乃ち彼は伸べしに、他の「手」如く健に直れり。三四 然





在りし如く、その如く人の子は三日と三夜、地の心のうちにあるべければなり。一、二本への人々は此の代と共に叛に立ち、且つこれを罪に定むるならん。是は彼等はヨナの直教にて悔ひ改められたればなり。然るに見よ、ヨナより勝れる者此處に在り。二、南の女王は此の代と共に義に起ち、且つこれを罪に定むるならん。是は彼はプロモンの智慧を聞かんとて、地の極より到りたるが故なり。然るに見よ、プロモンより勝れる者此處に在り。三、されど不淨なる靈の人より出で來りたるとき、休を索めつつ水なき處を經めぐり、かく見出ださず。四、そのとき彼云ふ、我が出で來りしところの我が家に歸らん。乃ち到りて「その」掃き清まり、且つ整ひて用ゐられざるを見出ださん。五、そのとき彼は往き、且つ己自らより尙ほ惡しき七つの他の靈を己と共に携へ來らん、かくて入り來りて彼等はそこに住まん。乃ちかの人の終は前より尙ほ惡しくならん。惡しき此の代もその如くあるべし。

六、然るに彼の尙ほ諸精衆に語たりておはししとき、見よ、その母と兄弟等と彼に語たらんことを索めて、外に立ちつつありき。七、五、されば或る者彼にいへり、見よ汝の母と汝の兄弟等と汝に語たらんことを索めて、外に立ちつつあり。八、然るに彼は答へて、彼にいへる者に曰へり、我が母は誰なるや。また我が兄弟等は誰なるや。九、かくて彼はその手を弟子等の方に伸べて曰へり、見よ、我が母また我が兄弟等なり。一〇、是は誰にても天に「我が父」我が父の意を爲す者、彼は我が兄弟また姉妹また母なればなり。

第十三章

またその日にイエス家より出で來りて海に出ひて坐し給へり。二、かくて多利亞岸に立てり。三、乃ち彼は論にて多くのことと語たりて、云ひ給ひけるは、見よ、種播く者多くの群衆彼の洋に集まれり。されば彼は船に乗りて坐し給ひ、また群衆はみかんとて出で來れり。四、かくて彼は掃きけるに、或るものは道のほとりに落ちたり。されば鳥來り、且つそれを喰ひ盡せり。五、また他のものは土多かりぬ岩地に落ちたり。されば直に生え出でたれど、土深からざる故に、六、太陽の昇りければ焦げ、且つ根なきのゆへに枯れたり。七、また他のものは茨の上に落ちたり。されば荊草ちてそれを覆けり。八、また他のものは長き地に落ちたり。さればあるは百、あるは六十、あるは三十の實を興へたり。九、聞くべく耳をもつ者は聞くべし。一〇、かくて弟子等進み來りて彼にいへり、何故に論にて彼等に語たり給ふや。一、乃ち彼答へて彼等に曰へり、是は汝等には天國の奧義を知ることと興へられたり。されど彼等には興へられざるが故なり。二、是は誰にても、有つ者はこれに興へられて餘りあるべく、されど有らざる者は、彼よりその有てるものより取り去らるべければなり。三、此のゆへに論にて彼等に語たるなり。四、是は神つつ彼等は視ず、また聞きつつ彼等は聞かず、且つ極らざればなり。五、さればイエスの豫言は彼等に於て成就せらるなり、云へらく、聞くために汝等は聞かん、されど必ず覺らず。また視るために汝等は視るならん、されど必ず覺らず。一、五、是は此の民の心は鈍り、また聞き耳にて彼等は聞き、またその目を閉ぢたればなり。彼等は目に

認め、耳にて聞き、また心にて解し、かくて聞く彼の等を漸くならんや  
 り。六、されば爾なるは汝等の目なり。そは視るが故なり。また「爾なるは」汝等の耳な  
 り。七、そは聞くが故なり。七、そは聞くにわかれ汝等に云はん、多くの聖言者等及び義しき者等は、  
 汝等の視るところのものを見んと欲して見ず、また汝等の聞くところのものも聞きんと欲し  
 て聞かずしが故なり。八、是の故に汝等種々者々の言を聞き、九、すて天國の言を聞き  
 て悟らざる者は、悪しき者來り、且つその心に播かれたるものを奪ひ去る。此の者は道のほとり  
 に播かれたるものなり。二〇、また岩地に播かれたるもの、此の者は言を聞き、且つ喜びて直に  
 これを受くる者なり。二一、されど彼は己自らに根をもたず、唯暫時なるのみ、言のゆへに根を  
 ひは迫害の遠るときは、直に踏かざるなり。二二、また茨のうちに播かれたるもの、此の者は言  
 を聞けども、此の世の心遣と密の惡とは言を聞き、秘り根からずなる者なり。二三、また良き  
 地に播かれたるもの、此の者は言を聞き且つ悟る者なり。彼は先に實を結び、あるは百、ある  
 は六十、あるは三十を出ださん。

二四、彼は他の喉を彼等の前に置きて、云ひ給ひけるは、天國はその前に良き種を播く人に等  
 し。二五、然るに人々の寝たるうちに、その毒麥を麥の中に播きて去れり。二六、  
 かくて昔萌え出で且つ實のなりしとき、そのとき毒麥も現はれたり。二七、されば家の主人の奴  
 隷等進み來りていへり、主よ、汝の畠には良き種を播かざりしか。されば毒麥は何處よりせし

や。六、乃ち汝等彼をけるは、敵人かく爲しなり。また奴僕等いへり、されば汝は我等の去つ  
 て、これを摘み取らんことを欲するや。七、然るに彼等之けるは、否。恐らくは汝等毒麥を摘  
 み取りつ、麥をも同に損毀するならん。三〇、種り入まで二つながら、同じに實つことを許せ。  
 かくて種り入の期にわれ種り入れ人に謂はん、先づ毒麥を摘み取れ、且つこれを焚くために束  
 に結べ。かくて麥をば我が谷に納めよ。

三一、他の喉を彼等の前に置きて云ひ給ひけるは、天國は芥子粒に等しきなり。人これを取  
 てその畠に播けり。三二、これは如何にも萬の種より小さし。されど育ちたるときは、諸の草より  
 大にして樹となるなり。三三、されば空の鳥降りてその枝に宿らん。

三四、彼は他の喉を彼等に託たり給へり、天國はパン種に等しきなり。婦これを取りて三斗の  
 粉のうちを隠しに、全く腹をすに至れり。

三五、イエスはさて此等の事を喉にて諸群衆に託たり給へり、また喉を離れては彼等に託た  
 り給はざりき。三六、是れ豫言者によりて謂はれしことの成就せらるためなりしなり、云ひけ  
 るは、われ喉にて我が口を開かん、われ世の創より「このかた」隠れたる事をいはん。

三七、そのときイエス諸群衆を差しおきて、家に歸り給へり。然るに弟子等彼に進み來りて云  
 ひけるは、島の毒麥の喉を我等に解き明し給へ。三七、乃ち彼答へて彼等に曰へり、良き種を播  
 く者は人の子なり。三八、また畠は此の世界なり。また良き種、此等の者は國の子等なり。され



て、何にても求むるものを與へんを彼に告白せり。八かくて彼はその母に勸められて、逃げて、  
 るは、どこにバアマのヨハネの首を、血に載せて我に與へよ。九されば玉は哀しみたれど、  
 聲と同席の人々とのゆへに與へらるべく命じたり。一〇かくて「人々を」遣はし、糧倉にて  
 ヨハネを贖れり。一 乃ちその首は血に載せて持ち來られたれば、少女に與へられしに、彼は  
 これをその母の許に持ち往けり。二 かくて彼の弟子等並み來り、鹽を取り去りてこれを棄り、  
 且つイエスの許に到りて報じたり。三 さればイエス聞きて人を遣ひ、彼處より船にて救しき  
 場處に退き給へり。然るに多くの群衆これを開き、市より徒歩にて彼に従へり。  
 一四 かくてイエス出で來りて大なる群衆を見給ひ、且つこれを不便に思ひ給ひければ、その  
 病身なる者を癒し給ひたり。一五 また夕になりしとき、弟子等進み來り、云ひけるに、場所は  
 荒野なり、且つ既に過ぎ往けり。村々に住きておのゝために食糧を買はんため、諸群衆  
 を去らしめ給へ。一六 然るにイエス彼等に曰へり。彼等は去るに及ばず、汝等これに喰はしめ  
 ら。一七 然るに彼等は彼に云ふ、我等が此處に持つは五つのパンと二つの魚とに過ぎず。一八  
 乃ち彼曰へり、此處にそれを我に持ち來れ。一九 かくて草の上にて席に敷くべく、諸群衆に命じ  
 給ひ、且つ五つのパンと二つの魚とを取り、天を視上げて御し給ひ、かくて彼はパンを擧げて  
 弟子等に與へ給へり。二〇 されば弟子等は諸群衆に「與へたり」三〇 乃ちあつての者喰へり、且つ  
 斃かされたり。かくて彼等は鹽片の餘りしものを拵ひしに、十二の手籃に盈ちたり。三二 また

食せし者は婦と幼児等の外、男約を五千ありき。三 かくてイエス直に諸群衆を去らしめ給ふ  
 うち、船に乗り且つ己に先き立ちて、南側に往かんことを弟子等に強ひ給へり。三三 また諸  
 群衆を去らしめ給ひしとき、彼は人を遣ひ、山に登り給へり。かくて夕になりしとき  
 獨にてそこにおはせり。三四 然るに船は海の真中に在りて波に難められたり。そは風逆らひた  
 ればなり。三五 かくて夜の第四時にイエス海の上を歩みて彼等の許に到り給へり。三六 されど  
 弟子等は海の上を歩み給ふ彼を見て驚き、云ひけるは、變化なりと、乃ち懼れて叫び出だせ  
 り。三七 然るにイエス直に彼等に語たり、云ひ給ひけるは、恐ましかれよ、我なり、懼るる勿  
 れ。三八 ペテロ乃ち答へて彼にいへり、主よもし汝におはさば、水の上を「歩みて」汝の許に  
 到ることを我に命じ給へ。三九 されば彼曰へり、來れ。乃ちペテロ船より下りてイエスの許に  
 到らんとて、水の上を歩めり。四〇 されど強き風を視て彼は懼れ、且つ沈み始めければ叫び出  
 だせり、云ひけるは、主よ、我を救ひ給へ。四一 乃ちイエス直に手を伸べ彼を攝み、且つ彼に  
 云ひ給ふ、懼仰小き者よ、何ぞ疑ふや。四二 かくて船に彼等の乗りしとき風は落ちたり。  
 四三 されば船のうちなる人々、彼の許に到りて奉伏し、云ひけるは、眞に汝は神の子にておは  
 します。  
 四四 かくて彼等は渡りてガネサレの地に到りたり。四五 然るにその處の人々彼を認め、廻く  
 その圍の地方に「人々を」使はしければ、人々愾ある者すべて彼に連れ來り、四六 且つ唯その

衣の縁に、彼等の罰をとどまらせんとせよ。かくて罰せらるる者は、かくて救はれたり。

第十五章

そのときエロソルヤより、馬者等とパリサイの人々、イエスの許に進み来て、云ひけるは、三何故に汝の弟子等は長老等の言ひ傳へ奉るや。それ

は彼等はパンを食するるとき、その手を洗はず。三然るにイエス答へて彼等に曰へり、何故に汝等も言ひ傳へ奉るや。四それは命にして、汝の父と母とを敬ふ、また父或ひは母を惡しきまに、いふ者は死罪にて終るべし、と云へばなり。五然るに汝等云へ、誰にても父或ひは母に向ひ、何にても我より汝の盆せらるるものは供へ物なり、といはば、必ずしもその父或ひは母を敬はざれば、六かくて汝等は汝等の言ひ傳ゆゆへに、神の誠を無教となす。七修業者よ、イサヤは汝等に就きて良く豫言せり、云ひけるは、八此の民はその口にて我に近づき、また唇にて我を敬ふ。されどその心は我より遠ざかる。九また彼等は人の敬を教として敬つ、徒に我を敬む。一〇かくて群衆を彼の許に召し、これに曰へり、閉け且つ悟れ。二口に入り來るところのものを穢さす。されど口より出て行くところのもの、

此は人を穢すなり。

二三そのとき弟子等進み來りて彼にいへり、パリサイの人々は此の言を聞き、厭かされたことを知り給ふや。三然るに彼答へて曰へり、すべて天なる我が父の植を給はざる樹木は根拔せらるべし。四彼等を差しおけ、盲者の手引する盲者なり。されど盲者もし盲者を手引

せば、双方とも穴に墮るらん。五然るにペテロ答へて彼にいへり、此の譬を我等に解き明し給へ。六乃かイエス曰へり、今たば汝等も悟なき者なるか。七すべて口に入り行くところの物は腹に入り、かくて剛に投げ出ださることを未だ解せざるか。八されど口より出て行くところの物は心より出て來る。乃ちそれらは人を穢す。九それは惡しき勘考（即ち）殺人、姦淫、淫行、偽證、圖。一〇此等のものは人を穢すところの物なり。されど洗はざる手にて喰ふことは人を穢さず。

三かくてイエスこそより出て來りて、ツロとシドン地方に退き給ふ。三然るに見よ、カナ人なる婦、かしの境より出て來りて叫び、云ひけるは、我を救ひ給へ、主よ、女は子の子よ。我が瘻は痛く腹に感かれたり。三然るに彼は一と膏をも答へ給はざりき。されば弟子等進み來り、請ふて云ひけるは、彼を去らしめ給へ。それは我等の後にに叫ぶが故なり。四されど彼答へて曰へり、我はイサエルの家の失せたる羊の外に使はざれず。五然るに婦判りて彼に平伏し、云ひけるは、主よ、我を助け給へ。六乃ち彼答へて曰へり、是等のパンを取主の食卓より落つるパン屑を喰へばなり。七そのときイエス答へて彼に曰へり、ああ婦よ、汝の信仰は大なり。汝の欲する如く汝になれ。乃ちその時より婦は歸されたり。八九かくてイエス彼處より移りて、ガリラヤの海の邊に來り給へり。かくて山に登りてそこ

に坐し給ひたり。三〇かくて多くの群衆は跛者、盲者、啞者、不具者、その他多くの者を連れて  
 進み來り、且つこれをイエスの足の傍に置けり。されば彼はこれを癒し給へり。三一されば  
 群衆は彼の語たり、不具者の健になり、跛者の跛を癒して癒かさされき。かく  
 して彼等はイエスエルの神を頌めたり。三二然るにイエス弟子等を召して曰へり、われ群衆を  
 不便に思ふ。それは金を斷ちたるままに彼等を去らしむることを欲せず。然らざれば彼等は遂にて  
 なり。三三乃ち弟子等彼に云ふ、かく程の群衆を癒かしむる程多くのパンは、荒野のうちな  
 る我等のために、何處よりこれを得べきや。三四然るにイエス彼等に云ひ給ふ。汝等いく  
 つのパンあるや。乃ち彼等いへり、七つと小き魚少し。三五かくて彼は群衆に命じて、地の  
 上にて席に敷かしめ給へり。三六また七つのパンと魚とを取り、感謝して擘き、且つ弟子等に  
 與へ給へり。されば弟子等は群衆に與へたり。三七乃ちすての者喰へり、且つ擘かさ  
 たり。かくて破片の餘りもつを拾ひしに、七つの籃に盈ちたり。三八また食せし者は婦と幼  
 兒との外に男四千ありき。

第十六章

またパリサイ並にサドカイの人々進み來りて彼をこ試みんとて、天につき  
 三九かくて群衆を去らしめしとき、彼は船に乗りてマガラの磯に到り給へり。  
 七〇の衆を彼等に見はまんとを謂へり。二然るに彼は答へて彼等に曰へり、

夕になりしとき、汝等は云ふ、天候好し、そは天赤ければなり。三また夜明けには云ふ、今日  
 は天候わらし。そは天候くして赤ければなり。偽善者よ、汝等は如何にも天の顔を見分くるこ  
 とを知れども、期の徴を見分くること能はざるか。四惡しき且つ姦なる代は徴を察む。さ  
 れど偽善者ヨナの豫にあらざれば、これに興へられじ。乃ち彼等を措きて去り給へり。  
 五また弟子等の両側に到りしとき、彼等はパンを携ふことを忘れたり。六かくてイエス彼  
 等に向へり、パリサイ並にサドカイの人々のパン種を視よ、且つ「これに」心せよ。七乃ち彼  
 等は己自らのうちに勘考して、云ひけるは、是れ我等のパンを携へざるが故なり。八されば  
 エス知りて彼等に向へり、俯仰小きき者よ、何故に汝等はパンを携へざることを己自らのうち  
 に勘考するや。九汝等は未だ五千「人」に五つのパンと、毛藍幾つに汝等は拾ひしかとを解せ  
 り、また憶ひ出ださざるや。一〇また四千「人」に七つのパンと、幾藍幾等は拾ひしかとをも  
 「憶ひ出ださざる」か。二「パリサイ並にサドカイの人々のパン種に心せよと、我の汝等に  
 ひしは、パンに就きてにあらざることを、如何にして解せざるや。三そのとき彼等はパンの  
 パン種に心せよと曰ひしにあらざる。されどパリサイ并にサドカイの人々の教に就きてのことな  
 るを悟れり。」  
 一三またイエスのヒリヤ地方に到り給ひしとき、弟子等に問ふて云ひ給ひける  
 は、人々は人の子を誰なりと云ふや。二乃ち彼等いへり、或る人々はバプテスマのヨハネ、

また他の者はエリヤ、また他の者はエリミヤ或ひは瑣等のうちの一人。一五彼等に云ひ給ふ、されど汝等は我を離たりと云ふや。一六乃ちシモンペテロ答へていへり、汝はキリスト、生ける神の子におはす。一七かくイエス答へて彼に曰へり、シモンバルサザルヨナエ、汝は彌那る者なり。そはこれを汝に黙示し給ひしは肉また血にあらず、天に「おはす」我が父なればなる。一八されば我も汝に云はん、汝はペテロなり。乃ち我は此の岩の上に我が教會を建てん、また陰府の門はこれに勝つまし。一九またわれ汝に天國の鍵を與へん、されば何にても地に於て汝の繫ぐものは天に於ても繫がるべし、また何にても地に於て汝の解くものは、天に於ても解かるべし。二〇そのとき彼は弟子等に、彼のイエス即ちキリストにおはすことを誰にもいふこと勿れ、と誓ひ含め給ひたり。

二一そのときよりイエス、彼の必すエロルムに去り行き、また長老等及び祭司長等並に諸藩等より、多くの苦を受け、また鞭され、また三日めに起され給はざるべからざることを示し給へり。二三さればペテロ進みて彼を執り叱して云ひ始めたり。主よ、汝に惡あれ、此の「こと」必す汝にあるまじ。二三然るに彼はふり返りてペテロに曰へり、我が後に往け、サタナ。汝は私の顯なり。そは汝は神の事を念はず、されど人のことを「念ふ」が故なり。二四そのときイエス弟子等に曰へり、もし誰ぞ我に跟き來らんを欲せば已に克ち且つ己が十字架を負ひ、かくて我に従ふべし。二五そは誰にてもその魂を救はんを欲する者は、これを失ふべし。

第十七章

また六日の後イエスはペテロまたその兄弟なるヨハネを携へ、人者のうちに彼の國に來る人の子を見るまで、必ず死を味はざる人々あり。二そのとき彼はその行爲に循ひて、おのおのに關ひてし。三又誠にわれ汝等に云はん、此處に立つニモそは人の子に將にその父の榮光のうちに、その使等と共に來らんとすればなり。かくてそ世界を離れてその魂を擧げ、何の益あらんや。或ひは人何を與へてその魂に換ふべけんや。四また誰にても我がためにその魂を失ふ者は、これを見出だすべければなり。五人もし全額は陽の如く輝き、またその衣は光の如く白くなれり。三また見よ、モテゼとエリヤ、彼等に現はれて、彼と共に語たる「なり」ヨハネもペテロ等へてイエスにいへり、主よ、此處にあるは我等のために良し。汝もし欲し給はば、我等に三つの座をここに造らしめ給へ、汝のために一つ、またモテゼのために一つ、またエリヤのために。五彼の何は語たりつありしうちにて、見よ、輝ける雲、彼等を覆へり。また見よ、雲よりの聲「あり」云ひ給ひけるは、此の者は我が子、愛せらるる者なり、彼に於てわれ格を得たり。汝等彼より聞け。六されば弟子等聞きて、その顔を伏せ且つ一方ならず懼れたり。七かくてイエス進み來り彼等に割りて曰へり、起きよ、且つ懼る勿れ。八乃ち彼等は其の目を擧げしに、唯イエスの外に誰をも見ざりき。九かくて彼等山より下りつありしとき、イエス命じて云ひ給ひけるは、人の子の死人のう



ちより起さるまで誰にもかの如くのことしをいふ勿れ。二 然るに弟子等問ふて云ひける

は、<sup>キリスチヤ</sup>キリスチヤは何故にエリヤは必ず先づ來らざるべからずといふや。一 乃ちイエス答へ

て彼等に曰へり、エリヤは如何にも先づ來り、且つすべての群を籠かこむすべし。二 三 されど汝

を汝等に云はん、エリヤは既に到りしに、彼等は彼を認めず、反つてその欲することを彼に爲

せり。かくの如く人の子も將に彼等より苦を受けんとす。三 其のとき弟子等はアタナスの

ヨハネに就きて曰ひしことなるを悟れり。

二 かくて群衆の許に彼等の到りしとき、或る人進み來りて彼の許に跪ひざまづき、五 且つ云ひ

けるは、主よ我が子を返かへり給へ。それは纏まとひにて痛く苦しめばなり。それは塵々火のなかに、ま

だ塵々水のなかに倒るればなり。一 六 さればわれ汝の弟子等の許に連れ來れり。されど彼等は

これを懸かすこと能はざりき。七 乃ちイエス答へて曰へり、ああ、信まことなき且つ曲まがれたる代なるか

な、我いつまで汝等のうちにあらんや。我いつまで汝等を忍しのばんや。彼をここに我が許に連れ

來れ。八 かくてイエス彼を叱のたまひ給ひしに、惡鬼復またより出で來りければ、蓋はその時より癒なさ

れたり。九 其のとき弟子等人を避けて、イエスの許に進み來りていへり。何故に我等は彼を

逐おひ出だすこと能はざりしや。三〇 乃ちイエス彼等に曰へり、汝等の信仰小ちき故なり。そは

賦うたにわれ汝等に云はん、汝等もし<sup>キリスチヤ</sup>キリスチヤの信仰あらば、此の山に、此處より復また陸に移れ、

と謂はんに、移るべければなり。また汝等に能はざることなかるべし。三 されど此の類は<sup>キリスチヤ</sup>

と斷つてにありざれば、出でて往まかざるべし。

三 また彼等のガリラヤに留とどめしとき、イエス彼等に曰へり、人の子は將に人々の手に付まか

されんとす。三 また彼等はこれを殺ころすべく、また三日めに彼は起たざるべし。乃ち弟子等一カ

ならず致しめり。

二 言また彼等のカペナウムに到りしとき、テトラキヤを取とり立つる人々、ペテロの許に進み

來りていへり、汝等の師はテトラキヤを納いれざるか。五 彼等云ふ、然り網あみむべし。かくて家

に彼の入り來りしとき、イエス先んじてこれに曰へり、云ひ給ひけるは、シモン汝には如何に

思はるや。地の王等は關かんじ或ひは頭あたま杖つゑを誰より取るや。彼等の子等よりか、或ひは他人より

なるか。三 彼等云ふ、他人より。イエス答へ給ひけるは、然らば子等は自由なる者な

り。七 三 されど彼等を誰かしめざるために、海に往きて釣つ針はりを投げよ、かくて一番に揚ありし魚

を取れ。かくてその口を開かば、汝は一スタテルを見出みだすべし。それを取りて我と汝とのた

めに彼等に與あよ。

その時に弟子等イエスの許に進み來りて云ひけるは、然らば天國にて大なる

者ものは誰なるや。三 乃ちイエス一人の幼こ兒ごを召し、これを彼等の真中に据

え、三 且つ曰へり、誠にわれ汝等に云はん、汝等もし<sup>キリスチヤ</sup>キリスチヤの幼兒ごの如くなるにあらずん

ば必ず天國に入り來るまし。是の故に誰にても此の幼兒ごの如く、己自らを卑ひする者、此



獲を見出だし、これを握へて喉を絞め、云ひけるは、汝の負へるものを我に償へ。元是の故にその僕の奴僕、彼の足下に伏して乞ふて、云ひけるは、忍び給へ。さればすべて汝に償ふべし。されど彼は欲せず、反つて去つて、その負ひしものを償ふまで、彼を権座に投げ入れたり。されば彼の僕の奴僕たち降りし群を見て、一方なを哀れしみ、到りて發りし群をすべて彼等の主に逃へたり。三そのときその主は彼を召して、これに云ひけるは、惡しき奴僕、汝われに乞ひし故に、我はかの負債をすべて汝に赦したり。三我の汝を監みし如く、必ず汝も汝の僕を塵埃さるべからざるにあらざらん。三かくて彼の主は怒りて、彼の負ひしものをすべて償ふまで、これを苛責人に任せり。三五もし汝等のおのその心より、兄弟等にその曲事を赦さずば、天なる我が父もかくの如く汝等に償ひ給ふべし。

第十九章

かくてイエスの此等の言を終り給ひしときかくありき。ガリラヤより移りて、ヨルダンの同側なるエグザの境に到り給へり。ニまた多くの群衆彼に從ひたれば、そこで彼等を癒し給へり。三かくてパリサイの人々、彼を試みんとて遣み來り、且つ云ひけるは、何の理由にてもその法を去るは人にとりて律しきや。四然るに彼答へて復等に曰へり、これを遣り給ひし者は初より男子と女子とに償ひ給ひ、五且つ彼はこれがために、人は父と母とを捨ててその妻に粘くべし。即ち二者一つの身たるべし、と曰ひしを汝等は讀まざるか。六さればも何や二つにはあらず、されど一つの身なり。是の故に神の合せ給ひし者、

人これを離すべからず。七彼等云ふ、されば何故にモナゼは去り罪を興へ、且つこれを去ること命ぜしや。八彼云ひ給ふ、モナゼは汝等の權なき心に對して、汝等の罪を去ることを許したり。されど初よりかくはあらざりき。九されば汝等に云はん、誰にても淫行の故なりてその罪を去り、且つ他の者を堅る者は姦淫を犯すなり。また去られたるを堅る者も姦淫を犯す(なり)と。一〇弟子等彼に云ふ、もし人の、妻に對する理由かくの如くならば、娶らざるは益なり。二然るに彼曰へり、此の言を堅くるはずして(の者)にあらざ、唯興へられたる者のみ。三それは母の胎よりかく生まれたる寺人あり、また人より寺人になされたる寺人の、また天國のゆへに己自ら寺人になれる寺人あればなり。受くることを得る者は娶くべし。三そのとき幼児等は手をその上に按ぎ、且つ斷り給はんために、彼の許に連れ來られけるに、弟子等これを叱したり。四然るにイエス曰へり、幼児等を差しおけ、且つ我が許に來るを禁ずる勿れ。そは天國はかくの如き者のものなればなり。五かくて彼は手を彼等の上に按ぎ給ひて(後)そより行き給へり。

ニまた見よ、一(人)彼の許に進み來りていへり、善師よ、永の生を得るために、如何なる誓をわれ爲すべしや。二そ乃ち彼曰へり、何故に汝は我を善といふや。善は一、即ち神の外におゐるなし。されど汝もし生に入り來らんと欲せば、敵を護れ。八彼云ふ、孰れをなすや。

乃ちイエス曰へり、殺す勿れ、姦淫する勿れ、盜む勿れ、偽の證を立つる勿れ、一汝の父と

母とを敬へ、また汝の隣人を汝自身の如く愛すべし、是れなり。二〇若き者彼に云ふ、我は勿  
 歩よりすべし此等の事を離れり。われ尚ほ何を缺くや。二一イエス之に答ひけるは、汝もし完  
 き者たらんと欲せば、汝の有ち物を賣り、且つ貧しき者に與へよ。されば汝は天に於て獲  
 きたらん、かくて來り、我に従へ。三 然るに若き者この言を聞きしとき、哀しみて去れり。

そは彼は天なる寶座を有ちたればなり。

三 かくてイエス弟子等に曰へり、誠にわれ汝等に云はん、富める者の天國に入り來るは難

し。四 されば復たわれ汝等に云はん、富める者の神の國に入り來るより、駱駝の針の糸を

通るは尚ほ易し。五 乃ち弟子等聞きて一方ならず驚かされ、云ひけるは、されば誰か赦はる

るを得ん。六 然るにイエス彼等をつらつら觀て曰へり、是れ人に添ふては能はざることな

り。されど神に添はばすべしとてのこと能ふなり。

七 其のときペテロ答へて彼にいへり、見よ、我等一切を差しおきて汝に従へり。されば我

等に何あるべきや。八 乃ちイエス彼等に曰へり、誠にわれ汝等に云はん、我に従へる汝等は

新なる代に於て、人の子その榮光の位に坐せんとし、汝等もイエスエルの十二の族を養きつ

十二の位に坐すべし。九 またすべて家、或ひは兄弟、或ひは姉妹、或ひは父、或ひは母、或

ひは兄、或ひは弟を我が名のために差しおきたる者は百倍を受け、且つ永の生を嗣ぐべし。三〇

されど多くの者、最先なる者は最終なる者、また最終なる者は最先なる者たるべし。

第二十章

そは天國は夜明ともに出で來りて、その葡萄園に働き人を雇はんとす、

家の主人なる人に等しければなり。二 彼は働き人と一日に一デナリの約束し

て、これをその葡萄園に使はせり。三 また第三時の頃出で來りて、空しく市場に立てる他の者

を見て、四 彼等にいへり、汝等も葡萄園に往け、されば何にても養しきものをわれ汝等に與へ

ん。五 乃ち彼等は往けり。復た彼は第六時と第九時との頃出で來りて等しく爲せり。六 また第

十一時の頃出で來りて、彼は空しく立てる他の者を見出たせり。さればこれに云ふ、汝等は

とて終日空しく此處に立つや。七 彼等云ふ、そは誰も我等を雇ふ者なかりしが故なり。彼云ふ、

汝等も葡萄園に往け、されば何にても養しきものを與へべし。八 かくて夕になりしとき、葡

萄園の主その家令に云ふ、働き人等を召してその賃銀を拂へよ。最終なる者より始めて最先な

る者に及べ。九 かくて第十一時の頃「雇はれたる」者到りて、おのおの一デナリを受けたり。

一〇 されば最先なる者到りて、彼等は尚ほ多く受くるならんと想へり。然るに彼等もおのおの

一デナリを受けたり。二 されば彼等の受けしとき、家の主人に逆らひ嘆きて、三 云ひける

は、此等の最終なる者の働かしは一と時なるに、一日の勞と譽とを負ひし我等と均しく爲せり

と。三 然るに彼答へて彼等の一「人」にいへり、假令、我は汝に不義を爲さず。汝は我と一

デナリを約束せざりしや。四 汝のものを取りて往け。されど我は此の最終なる者にも、汝に

「與へし」如く與へんと欲す。五 或ひは我がものなるものにて、我が欲するところを爲す

は、我がために替ししからざるか。若しくはわれ善きが故に汝の目は悪しきか。一六かくの如く最終なる者は最先なる者、また最先なる者は最終なる者たるべし。是は召されたる者は多くの者なれども、選ばれたる者は僅なる者なればなり。

一七またイエスのエロソルマに上り給ふとき、遂にて人を選りて十二弟子を近づけ、且つこれに曰へり、一八見よ、我等エロソルマに上る、かくて人の子は祭司長等と輿者等とに付されん、また彼等はこれを犯罪に定めん、一九また彼等は嘲り、また十字架につけんため國人に行きん。かくて彼は三日めに起つべし。

二〇そのときゼバイの子等の母、その子等と共に至り、且つ彼に寄りて何事を求めんとて、彼の許に進入來れり。二一彼乃ち彼に曰へり、汝等は何を欲するや。彼云ふ、此等の我が二人の子の、汝の國に於て一は汝の右手にて、一は左手にて坐するやう曰へ。二三然ると、イエス答へて曰へり、汝等は求むるところのものを知らず。汝等は我が將に飲まんとする杯を飲み、また我がバテスマせらるるバテスマにて、バテスマせらるることを得るや。彼等云ふ、能くすべし。二三乃ち彼等に云ひ給ふ、如何にも我が杯を汝等は飲み、また我がバテスマせらるるバテスマにて、バテスマせらるる者におみ。二四かくて坐することば、與ふべき我がものにあらず、唯我が父より備へられたる者におみ。二五かくてこれを告げて、十人はこの二兄弟に就きて應立てたり。二五されどイエス彼等を召

して曰へり、汝等は國人の長たる人々は彼等を主どり、また大なる者は彼等の上に權を執ることを知る。二三されど汝等のうちにてはその如くあるべからず。されど誰にても大なる者にならんと欲する者は、汝等の事へ人たるべし、二三また誰にても汝等のうちにて、一番たんと欲する者は、汝等の奴隷たるべし。二六されば人の字を事へらるるために來りしにあらざ、されど事へ且つ多くの者のために、その魂を賣に供へんとてなり。

二七また彼等のエリコより出で往きしとき、大なる群衆彼に従へり。三〇また見よ、道の傍に坐し二人の賣者イエスの過ぎ給ふことを聞きて叫び出で云ひけるは、我等を赦み給へ、主よ、ダビデの子よ。三一然るに群衆は彼等の駈するやうこれを叱したり。されど彼等は乃ち直にその目は神力を受けたり。かくて彼等は彼に従へり。

第二十一章 かくて彼等はエロソルマに近づきて、エライツ山の山の對なるベテサゲに到りしとき、イエス二人の弟子等を使はして、二これに云ひ給ひけるは、汝等の對なる村に往け、されば汝等直に繋かれたる牝驢とその仔驢馬とを見出だすならん、それを繋きて我が許に連れ來れ。三またもし誰ぞ汝等に何事をかいはば、汝等は謂

主これを棄し給ふと、されば直に彼はそれを便はすならん。此は全く豫言者によりて書はれしことの、成就せらるるために發せり、云ひけるは、エサオンの娘に、且と汝の王は柔和にして隨馬に、即ち駒の歌の子なる存隨馬に乗りて來り給ふ。六乃ち弟子等往き、且つイエスの彼等に仰せし如く傳じて、七牝驢馬と仔驢馬を連れて來れり。またその上に彼等の杖を置けり。乃ち彼はこれに乗り給ひぬ。八かくて群衆の多くの者は已が衣を道に敷き、また他の者は藁より杖を俵り落して、これを道に敷けり。九また前に往く多くの群衆と、後ろに從ふ群衆とは叫び出でつありき、云ひけるは、ダビデの子にホサナよ、主の名に於て來り給ふ者は祝せられます者かな。至高き處にホサナよ。

十かくて彼のエロルマに入り來り給ひしとき、市驛りて擧かきれて、云ひけるは、此の者は誰なるや。一乃ち諸群衆云ひけるは、此の者は豫言者なるイエス、即ちガリラヤのナザレトの者なり。

二かくてイエスは神の殿に入り來り給ひて、その内に賣る者と買ふ者とを逐ひ出だし、また兩架する者の臺と錢を賣る者の腰掛を倒し給へり。三また彼等に云ひ給ふ、我が家は神の家のと稱らるべし、と毀されたり。然るに汝等はこれを強盜どもの巢と爲せり。四また神殿に尸居たる、盲者、跛者等の彼の許に進み來りければ、これを逐し給へり。五然るに祭司長等も衆者等とは、彼の爲し難くし難くし難くと、神殿にて叫び且つ、ダビデの子にホサナ

六、と云ふ子匠とを見て販立てたり。七乃ち彼にいへり、汝は此等の者の云ふことを聞かや。然るにイエス彼等に云ひ給ふ、然り。小兒等また乳兒等の口に讚美を稱へ給へり、とあるを汝等は未だ識まざるか。一七かくて彼等を描きて、彼は市を出でてベタニヤに到り、且つそこにて「夜を」野外に過ぐし給ひたり。

一八また彼は夜明に市に歸るとき、飢ゑ給ひたり。一九かくて道の傍なる一本の無花果樹を見て、そのもとに判り給ひしが、唯葉のみにて何をも見出で給はざりき。さればこれに云ひ給ふ、今より後いつまでも汝より實は生させられ。かくて忽ち無花果樹は枯れたり。三〇されば弟子等見て異しみ、云ひけるは、如何にして無花果樹は忽ち枯れたるや。三乃ちイエス答へて彼等に曰へり、誠にわれ汝等に云はん、汝等もし信仰を保ちて疑はずば、實に無花果樹に「爲されたる」ことを汝等も爲すのみならず、尙ほ此の山に、汝取り去られよ、且つ海に投げ入れられよ、と云ふとも應ふべし。三また去て何にても、汝等の信じて禱に於て求むることとを受くべし。

三三かくて彼の神殿に到りて教へ給ひしとき、祭司長等と民の長老等と進み來りて、云ひけるは、何の權にて此等の事を汝は爲すや。また誰が汝に此の權を與へしや。三三乃ちイエス答へて彼等に曰へり、我も一と言を汝等に問はん、それをもし汝等われにいはば、我も汝等に何の權にて此等の事を我は爲すかを謂ふべし。三五かのヨハネのバプテスマは何處よりなりし

や。天よりか、或ひは人よりか。然るに彼等は己目のうちに勘考して、云ひけるは、我等も  
し天より云はば、然らば何するぞ汝等は彼を信ぜりしや、と彼は我等に翻ふならん。二三

されど我等もし人よりいひば、我等は群衆を權る。そはかな羅言者としてヨハネを保てばな  
り。ニモかくて彼等イエスに答へていへり、我等は知らず。彼も我等に迷へ給ひけるは、我も

何の權にて此等の事を、我は爲すかを汝等に云はじ。二三されど如何に汝等に思はるや、或  
る人另二〔人〕あり、かくて最初の者の許に遣み來りて彼いへり、見よ、今日我が葡萄園に住

きて働け。二三然るに彼答へていへり、我は欲せず。されど後に働いて往けり。二三また次の  
者の許に遣み來りて彼は等しくいへり。乃ち彼答へていへり、主よ、われ往かん。されど往

かざりき。三此の二人のうち孰れが父の意を爲しや。彼等云ふ、最初の者なり。一  
ニス徒等に云ひ給ふ、誠にわれ汝等に云はん、關稅人また遊女等は汝等に先立ちて神の國に住

かん。三それはヨハネは義の道をもて汝等に到りしに、汝等は彼を信ぜず、されど關稅人また  
遊女等は彼を信じたればなり。また汝等は見しかど、彼を信ずるために後に働ひもせざりき。

三三他の喩を聞け。家の主人なる或る人ありき。彼は葡萄園を仕立て、且つこれに籬をめぐ  
らし、また酒槽をそのうちに掘り、また橋を建てたり。かくてそれを農夫等に貸して遠國に住

使はせり。三三然るに農夫等はその權杖を執へ、あるは打ち、あるは殺し、あるは石でり。三三  
けり。三三かくて實の期の近づきしとき、彼は己が實を受けんとて、農夫等の許にその奴隷を

復た彼は他の奴隷を最初よりも多く使はししに、彼等は此等にも等しく爲せり。三三されば  
最後に、彼等は我が子を歡ぶならん、と云ひつ彼はその子を彼等の許に使はせり。三三然る

に農夫等はその子を見、己らのうちにいへり、此の者は世嗣なり。いざ來れ、我等これを  
殺し、且つその嗣業を占めん。三三乃ちこれを執へ、葡萄園の外に擲み出だし、且つ殺せり。

三三是の故に葡萄園の主自らんとき、かの農夫等に何を爲すべきや。二彼等云ふ、彼は惡し  
き〔者〕を新く打ちてばし、且つ葡萄園をその期に當りて、實を渡す他の農夫等に貸すべし。

三三イエス彼等に云ひ給ふ、汝等は聖書にて、家を建つる人々の棄てたる石、此の者は脚の首  
石となれり、此の〔こと〕主より出でたり、されど我等の目には不思議なり、とあるを未だ

讀まざるか。三三此のゆゑにわれ汝等に云はん、神の國は汝等より取り去られ、且つその實を  
出だす國人に與へられん。三三また此の石の上に落つる者は碎かれ、また〔此の石〕誰の上に

落つるとも、これを微塵に碎くべし。三三かくて祭司長等及びパリサイの人々、彼の喩を聞き  
しとき、彼は彼等に就きて云ひ給ふことを知れり。三三されば彼等は彼を拘へんことを案じた

れど、群衆を懼れたり。是れ彼等は羅言者として彼を保ちたるが故なり。

かくてイエス答へて復た喩にて彼等に曰へり、云ひ給ひけるは、三天國  
はその子のために、婚姻を爲す王なる人に等し。三三かくて婚姻に講せら

第二十三章

れたる人々を召ばんとて、奴隷等を使はししに、彼等は來ることを欲せざりき。三三復た他の奴

使を便はして、云ひけるは、誰ぞられたる人々に云へ、見よ、われ使徒を用置ざり、我が年と  
 配たる者とは附られ、またすべての物備はれり、いざ婚筵に來れ。五然るに彼等は願みずし  
 て、或る者は巴が品に、また或る者は商賈に去れり。六またその餘の者は使徒を捕へて辱し  
 め、且つ殺せり。七されば王聞きて怒り、軍勢を遣はして、かの人殺ともを亡ぼし、またその  
 市を燒けり。八そのとき彼は使徒等に云ひけるは、如何にも婚筵は備はりたり、されど誰ぞら  
 だたる者は値せざる者なりき。九是の故に達の通り通りに往け、且つ汝等の見出たさん程のも  
 のを婚筵に請ぜよ。一〇乃ちかの使徒等は達に出で來りて、惡しきをもまた善きをも、彼等か  
 見出だしし程の者をすべて連れ來れり。されば婚筵は席に落ける者にて満たされたり。二か  
 くて王は席に落ける者を看んと入り來りしに、婚筵の衣を着けざる人を見出だせり。三乃  
 ちこれに云ふ、何ん、如何なれば婚筵の衣を着けずして此處に入り來りしや。然るに彼は噤め  
 り。三そのとき王、事へ人等にいへり、彼の足と手とを縛りて暗に、外に投げ出だせ。そこ  
 にて歎くこと、また切齒することあるならん。四それは召されたる者は多くの者なれど、選ば  
 れたる者は稀なる者なればなり。  
 二五そのときハリカイの人々往きて、如何にしてか彼を言にて縋に掛けんと協議を聞けり。  
 一六かくて彼等はその弟子等を、ヘロデ黨の人々と共に彼の許に使はし云ひけるは、師よ、我  
 等汝は眞にておはし、且つ眞理をもて神の道を教へ給ふことを知る、されば誰一人汝に就き

て心違ひする者なし。七汝は人の額を祝給はさればなり。一七是の故に我等に曰へ、如何に汝  
 には思はるや、頭税をカイサルに納むるは律しきや、或ひは然らざるか。一八然るにイエス  
 その邪を知りて曰へり、偽善者等よ、何ぞ我を試むるや。一九頭税の通貨を我に見はせ。乃ち  
 彼等はデナリを持ち出だしたり。二〇されば彼等に曰へり、此の形と銀とは誰のなるや。二一  
 彼等は云ふ、カイサルの。そのとき彼は彼等に云ひ給ふ、是の故にカイサルの物はカイサルに  
 納むるは神に納めよ。三乃ち彼等は聞きて驚けり。かくて彼を差しおきて去りぬ。  
 二三その日に題をあることなし、と云ふサドカイの人々進み來り、且つ彼に問ふて、二四云  
 ひけるは、師よ、モラゼいへり、もし誰そ男をもたずして死なば、その兄弟その妻を娶り、且  
 つ兄弟のために種を起すべし。二五然るに我等の傍に七人の兄弟ありき。かくて、一番め  
 は娶りて死にたり。されど種あらざりければ、その妻を兄弟に遺せり。二六二番めも、三番め  
 も、七人まで等し。二七かくてすべての者の後に嫡も死ねり。二八されば題に於て、彼は七人  
 のうちの誰の妻たるべきや。それはみな彼を娶りたればなり。二九然るにイエス答へて彼等に曰  
 へり、汝等は聖書を、また神の力をも知らざれば觀れり。三〇それは題に於ては娶らず、また  
 嫁がず、されど彼等は天に在る神の使等の如くにあればなり。三一また死人の甕に就きては、  
 神より汝等に請ひ給ひしことを讀まざるか、云ひ給ひけるは、三我はアラムの嗣、また  
 イサカクの神、またヤコブの神なり。神は死人の神におはさず、されど生ける者の神におはし



ます。三乃ち群衆聞きて、その數に驚かされき。

三然るにパリサイの人々はサドカイの人々を、彼の嘆まじめ給ひしことを聞きて、同じ處に集まれり。三かくて彼等のうちの一「人の捉學者、彼を試みつつ問へり、云ひけるは、

三夫師よ、掟のうちにて大なるは孰れの誠なるや。三乃ちイエス彼に曰へり、汝の心の全きをもて、また汝の魂の全きをもて、また汝の思の全きをもて、主、汝の神を愛すべし。三是れ第一にして大なる誠なり。三又また第二もそれと等し、汝の隣人を汝自身の如く愛すべし。

三此の二つの誠に掟の全「部」と豫言者等とは懸れり。

三かくてパリサイの人々の集まりければ、イエス彼等に問ふて、三云ひ給ひけるは、汝等はキリストに就きて如何に思ふや。彼は誰の子なるや。彼等云ふ、ダビデの。三彼等に云ひ給ふ、されば如何にしてダビデは筵に在りて、彼を主と呼ぶや、云ひけるは、三主は我が主に曰へり、われ汝の敵を汝の足の足裏に据うるまで、我が右手にて坐せ。三是の故にもし

答へ得る者なく、またもはやその日より誰も敢て彼に問はずりき。

そのときイエス諸群衆と弟子等とに話たりて、三云ひ給ひけるは、學者等とパリサイの人々とはモラゼの座に坐す。三是の故に何にても彼等

第二十三章

が麗るべく汝等にいふすべての事を驅れ、且つ爲せ。されどその行に備ひて爲す勿れ。そは彼

等は云ふて爲さざればなり。三そは彼等は重くして擔ひ難き荷を担ひて、人々の肩に置く、

れど己はその指にてこれを動かすことをも欲せざればなり。三また彼等はそのすべての行を人

人に看られんがために爲す。また彼等はその護符を厥くし、またその衣の縁を大にし、また

晩餐に於ける上座、また會堂のうちの上座、また市場にての挨拶、また人々よりラビ、ラビ

と呼ばれることを好む。三されど汝等はラビと呼ばる勿れ。そは汝等の教師は、即ちキリ

ストにして、汝等はみな兄弟なればなり。三また海船と呼はる勿れ。そは汝等の尊

師は「即ち」キリストにおはせばなり。三また汝等の大なる者は汝等の欺へ人たるべし。

三また誰にても己自らを高うする者は卑うせらるべく、また誰にても己自らを卑うする者は

高うせらるべし。

三また汝等禍なるかな、偽善者なる學者等とパリサイの人々よ。そは汝等は藤の家を嘆ひ

盡し、かくて託に長く祈ればなり。此のゆへに汝等は尙ほ勝れる義を受くるならん。三汝等

禍なるかな、偽善者なる學者等とパリサイの人々よ。そは汝等は許して入り來らしめざれば

なり。そは汝等は入り來らず、また入り來りつつある者をも、汝等は許して入り來らしめざれば

なり。三汝等禍なるかな、偽善者なる學者等とパリサイの人々よ。そは汝等は一人を改宗者

に爲さんとて、海と陸とを往きめぐり、かくてそのなりしときは、汝等これを汝等に倍したる

六かゝの如く汝等も、外側は如何にも人々に義しき者に現はるれども、内側は偽善と不法と等々の血に於て彼等の仲間たざりしものを、と云へばなり。三、されば汝等は己自ら、豫言者等を殺しし者の子等なることを認す。三、されば汝等は己が先祖等の樹目をば満たせ。三、汝と娘の猶よ、如何にして汝等はケンナの穀より遁るべけんや。三、此のゆへに、且よ、われ汝等に豫言者等と智き人々と與者等とを便はさん、然るに汝等はその「或る者」を殺し、また十字架につけ、また市より市に到りて追害するなり。三、即ち義者アルの血より、聖所と祭壇との間にて殺されし、バラキヤの子サカヤの血に至るまで、地に流されたるすべての義しき者の血は、汝等の血に到るべきためならず。三、汝等にわれ汝等に云はん、此等の事はすべて此の代の上に到るべし。三、モエルサレムと、豫言者等を殺し、また己が許に便はされたる人々を石つエルサレムと、われ此等の己自らの鎌を、その穀の下に集むるが如く、汝の足等を集めんと欲せしこと幾度ぞや。然るに汝等は欲せざりき。三、且よ、汝等の家は荒れ廢れて汝等に差しおかれん。三、九、そはわれ汝等に云はん、今より後、必ず主の名に於て來る者は脱せられず者かな、と汝等の云はん「時の至る」まで、我を見ざるべければなり。

アタノ子たらしむればなり。一、汝等納なるかな、盲者なる手引等よ。汝等は誰にても聖所をもて誓ふ者は事なし、されど誰にても聖所の黄金をもて誓ふ者なり、と云ふ。二、恩なる者にて盲なる者等よ。黄金と黄金を聖ならしむる聖所とは御社大なるや。一、汝等納なるかな、御社大なる者にて盲なる者等よ。黄金と黄金を聖ならしむる聖所とは御社大なるや。二、汝等納なるかな、盲者なる手引等よ。汝等は誰にても聖所をもて誓ふ者は事なし、されど誰にても聖所の黄金をもて誓ふ者なり、と云ふ。三、汝等納なるかな、偽善者なる聖者等とバラサイの人々よ。汝等は薄荷、また面香、また馬斤の十分の一を納む。されど捉の重んずるところの事なる、裁と堅之信とを差しおぐ。必ずこれらを偽さるべからず、またそれらも差しおぐべからず。二、盲者なる手引等よ。汝等は誰を誣し出だせども、駭駭をば吞み盡くす。三、汝等納なるかな、偽善者なる聖者等とバラサイの人々よ。それは汝等は杯また血の外側を淨くす、されども内は貪慾と淫慾とにて滿つればなり。二、盲者なるバラサイ人よ、杯また血の外側を淨くす、先づその内側を淨くせよ。三、汝等納なるかな、偽善者なる聖者等とバラサイの人々よ。それは汝等は白く塗りたる墓の如何にも外は美しく且妙なども、内は死人の骨とすべての不淨とにて滿つるに例たればなり。

第二十四章

かくてイエスは神殿より出て来りて行き給へり。然るに弟子等進み来りて神殿の建物を彼に見はす。三 然るにイエス曰へり、汝等は此等のすての事を視ざるか。誠にならば汝等に云はん必ず崩されざる石の上に一つの石をも此處に差しおかれざるべし。三 かくて彼のエライツの山の上に坐し給ひしとき、弟子等人を避け過か來りて、云ひけるは、我等に曰へ、いつ此等の事あるべきや。また汝の來臨と世の完成との徴は何なるや。四 乃ちイエス答へて彼等に曰へり、誰も汝等を惑はすことなきやう視よ。五 是は多くの者、われはキリストなり、と云ひつつ我が名に於て來るべければなり。かくて彼等は多くの者を惑はさん。六 また汝等は將に軍と軍の風聞とを聞くならん。報よ、ふたれく勿れ。是はすべての事は必ず發らざるべからざればなり。されど未だ終はあらず。七 是は國人は國人に逆らひ、また國は國に逆らひて起ち上り、飢饉また疫病また地震とるどころにあるべければなり。八 されど此等の事はみな陣痛の初なり。九 そのとき彼等は汝等を義に付し、且つ殺すならん。また汝等は我が名のゆへにすべての國人より悔まるべし。一〇 またそのとき多くの者は置かされん、また彼等は互に付し互に憎むべし。一 また多くの隠賢者起りて、多くの者を殺すべし。二 また不法を増さるゆへに、多くの者の愛は増え冷かになるならん。三 されど終まで耐へ忍ぶ者、此の者は救はるべし。四 かくてすべての國人に罰のため(天)國の此の福音は全世界に宣へらるべし。かくてそのとき終は到るべし。五 是の故に汝等は隱賢者

アエルによりて謂はれし、かの荒らす者、聖なる所に立つを見るとき、誠者憐れむ。六 そのときエウヂヤに在る者は山に遁れよ。七 また屋の上なる者はその家より何をもちり出ださんとて下る勿れ。八 また屋にある者はその衣を取らんとして後ろに歸る勿れ。九 されどその日には孕める者と、乳を哺ましむる者とは嗣なるかた。一〇 されば汝等の運るべし。冬にもまた安息日にも發らざるやう祈れ。二 是は世の初より今に至るまで發りしことなく、後にも必ず發らざる程の、大なる難あるべければなり。三 さればそれらの日を少なくせられざりしならば、すべての肉は救はれざりしならん。されど選ばれたる者のために、それらの日は少なうせらるべし。三 そのとき誰ぞもし汝等に、見よ、キリストは此處に、或ひは此處に、と云ふとも信ずる勿れ。四 是は多くの隠キリストまた隠賢者起るならん。かくてもし能ふべくんば、選ばれたる者をも惑はす程の、大なる難と奇跡とを興ふべければなり。五 見よ、われ汝め汝等にいへり。六 是の故に彼等もし汝等に、見よ、彼は荒野におはす、と云ふとも田で來る勿れ。見よ、部屋におはす、と云ふとも信ずる勿れ。七 是は電の東より出で來り、また遠く西に現はる如く、人の子の到來もかくあるべければなり。八 是は屍のあふんところ、そこに遊樂するべければなり。九 されどそれらの日の難の後に、直に隱は暗くなり、また月はその光を與へず、またもるもの星は天より墮ち、またもるもの天の力の震はれん。一〇 かくてそのとき人の子の徴は天に現はるべし。またそのとき地のもるもの族

は欺くべし。かくて彼等は大きな石と燈火のうち、天の雲に乗りて来る人の子を目のあたり見るべし。三 また彼は大きな喇叭の響のうち、その使等を使はさん。彼等は天の雲よりその極に至る四つの風にて、その選ばれたる者を集むべし。

三 されど無花果樹より喩を學べ。その枝既に柔かにして葉のめぐむるとき、汝等は夏の近づけることを知る。三 かくの如く汝等も此等のすべての事を見るときは、その近づきて門口にあることを知れ。三 誠にならば汝等に云はん、すべて此等の事の發るまでは、必ず此の代は過ぎ去ることなかるべし。三 天と地とは過ぎ去らん、されど我が言は必ず過ぎ去らじ。三

されどその日と時とに就きては、驚り我が父の外に誰一人知る者なし。天の使等も「また子も」知るべし。三 さればかのノアの日の如く、人の子の到来もその如くあるべし。

三 汝等は洪水のありし前の日に、ノアの方舟に入り來りし日まで、彼等は酔ひつまた飲みつ、及びつまた嫁きつありて、三 洪水到りてすべてを取り去るまで、これを知らざりし

如く、人の子の到来もその如くあるべければなり。

四 其のとき二「若し」皇にあらんに、一男は取られ、また一男は差しおかれん。二「若し」

驢馬にて曰ひきて「あらんに」一女は取られ、また一女は差しおかれん。

三 是の故に目を覺ましをれ。そは汝等の主はいづれの時に來り給ふかを知らざればなり。

三 されどそれを知れ。もし家の主人いづれの時期に盜人の來るかを知らざらんば、目を覺

まし、且つその家を穿たしめざりしことを。四 此のゆへに汝等も備われよ。そは汝等の思は

ざる時に人の子は來ればなり。五 されば期に於て食物を彼等に與ふために、家庭等の上に

の掛うる箱にして、情き奴僕を誰なるや。六 主到りてかく偽しつあるを見出ださば、かの奴

僕は無なる者なり。七 誠にならば汝等に云はん、彼はその有ち物のすべての上にこれを掛うべ

し。八 されどもしかの惡しき奴僕その心のうちに、我が主の來るは遅しと云ひて、九 個

の奴僕等を打ち、酒の偈等と共に食し且つ飲み始むるならんば、至るかの奴僕の手は期せざ

る日に、また知らざる時に到りて、十 彼を切つて二にし、且つその分を僞善者等のうちに

置くべし。そこに欺くこと、また切齒することあるならん。

第二十五章

そのとき天國は花嫁に往き遂はんとて、燈火を執りて出て來れる十人

の處女等に等しうせらるべし。三 然るにそのうち五人「人は情き者にて

五人」は愚かなるなりき。三 愚なる者等は己自らの燈火を執りたれど、己のエライオンをば

執らざりき。四 されど情き者等は己の燈火と共に、その器にエライオンを執れり。五 然るに花

嫁過かりしかば、彼等はみな眠氣として寝ねたり。六 かくて眞夜中に叫び發れり。見よ、花嫁

來る、彼に往き遂はんとて出で來れ。七 そのときかの處女等みな起ち、且つ己自らの燈火を

整へたり。八 かくて愚なる者等、情き者等にいへり、汝等のエライオンのうちを我等に與へよ。

そは我等の燈火は熄火かかりたればなり。九 然るに情き者等答へて、云ひけるは、恐らくは我





一四 そのとき十二のうちの一（人）なるイスカリオテのユダと云はれし者、祭司長等の許に  
 往きて、エヒけるは、われ汝等を汝等に付さば、何を汝等は我に興へんと欲するや。乃ち彼  
 等は銀三十を彼に捕えたり。二六 さればそのときより彼を付さんために、好まむをば彼は禁め  
 たり。

一五 かて離脱の始（日）に弟子等イエスの許に進み來りて、云ひけるは、遠慮を噴ぐべ  
 ぐ汝のため、何處に我等の應へんことを欲し給ふや。二八 乃ち彼曰へり、市のかくかくの者の  
 許に往け、且つ彼にいへ、卽は云ひ給ふ、我が期は近づけり。われ汝の許にて我が弟子等と共に  
 遊戯を爲すべし。二九 乃ち弟子等イエスの彼等に指圖し給ひし如くに爲して、遊戯を罷へたり。  
 三〇 かて夕になりければ、彼は十二と共に席に覆き給へり。三二 また彼等の食しつあり  
 しとき、彼曰へり、誠におれ汝等に云はん、汝等のうちの一（人）我を付すならん。三三 され  
 ば彼等一方ならず哀しみておのおの彼に云ひ始めたり、主よ、或ひは我なるか。三三 乃ち彼答へ  
 て曰へり、我と共に手を血に浸せる者、此の者は我を付すべし。三四 如何にも人の子は彼に就  
 きて殺されたる如くに往く。されど人の子を付すかの人は離なるかな、かの人は生れまざりし  
 ならば良かりき。三五 然るにユダ、彼を付せし者答へていへり、ラビ、或ひは我なるか。彼に  
 云ひ給ふ、汝はいへり。  
 三六 また彼等の食しつありしとき、イエスをとり、且つ殿して擧ぎ給へり。かくて弟

子等に興へて曰へり、取れ、喰へ。此は我が體なり。三七 また杯を取り、且つ感謝し、彼等に  
 興へて云ひ給ひけるは、みなそれより飲め。三八 されどおれ汝等に云はん、かの日我が父の  
 きて罪の赦のために流さるるものなればなり。三九 されどおれ汝等に云はん、かの日我が父の  
 國にて、祈しき（もの）を汝等と共に飲むまで、葡萄の此の實（り）のものを「我は必ず飲まし。  
 四〇 かくて讚美を歌ひつ彼等はエライムの山にまで出で往けり。三一 そのときイエス彼  
 等に云ひ給ふ、汝等みな此の夜のうちに我に預かざるならん。そは、われ牧者を撃たん、さ  
 れば群の羊は散るべし、と殺されればなり。三二 されどおれ起きて後、汝等に先立ちて方  
 リヤに往くべし。三三 然るにペトロ答へていへり、假令みな汝に預かざるも、我は決し  
 て頭かきまじ。三四 イエス述べ給ひけるは、誠におれ汝に云はん、此の夜のうちに鶏の鳴く以  
 前に、三たび汝は我を否むべし。三五 ペトロ彼に云ふ、假令われは必ず汝と共に死なざるべ  
 からざることありとも、必ず汝を否まじ。弟子等もみな等しくいへり。  
 三六 そのときイエス彼等と共にゲッセエと云ふ處に來り給ふ。然るに弟子等に云ひ給ふ、  
 此處に坐せよ、その間我は去つて彼處にて祈るべし。モかくてペトロとゼエダイの二人、  
 の子と並携へ「往き」つ、哀しみ且つ頂垂れ始め給へり。三八 そのとき彼等に云ひ給ふ、我  
 が魂は死なばかりにいと哀し。此處に留まれ、且つ我と共に目を覺ましを。三九 かくて少  
 し進み往きて、その類を伏せて祈り、且つ云ひ給ひけるは、我が父よ、もし能くくんば、此

の杯を我より過ぎ去らしめ給へ。されど我が欲するままにあらず、されど汝のまゝに「屬し給へ」ヨヨ。かくて弟子等の許に來り、且つ疑はる彼等を見出だし給ふ、さればペテロに云ひ給ふ、汝等はいかゞと時を、我と共に目を覺ましむること能はざるか。四。目を覺ましをれ、且つ試に入り來らぬやと祈れ。是れ靈は如何にも切に哀めども、肉腐きなり。三。復た二たび去つて祈り、云ひ給ひけるは、我が父よ、もし此の杯を飲まで、我より過ぎ去らしむること能はずば汝の意をならしめ給へ。五。かくて彼は來りて復た疑はる彼等を見出だし給ふ。是は彼等の目醒ればなり。四。かくて彼等を差しおき、復た去つて三たび同じ言を曰ひつ祈り給へり。五。そのとき彼は弟子等の許に來り、且つ彼等に云ひ給ふ、此の餘は飲ねど、且つサレバ、我を付す者近づけり。

六。見よ、我を付す者近づけり。七。かくて何程彼の許たりておはししとき、見よ、十二のうちの一（人）なるユダ到れり。八。かくて何程彼の許たりておはししとき、祭司長等及び民の長老等より「來れり」。八。また彼と共に大なる群衆は劍と棒とをもちて、祭司長等及び民の長老等より「來れり」。九。また彼を付しつありし者、合圍を彼等に與へて、云ひけるは、我が接吻する者は彼なり、それを握へよ。四。乃ち直に彼はイエスの許に進み來りて「ハ、ラビ、廢し。かくて幾度も接吻を握へよ。五。然るにイエス彼に曰「ハ、何のために來れるや。そのとき彼等進み來りて手を握へよ。六。見よ、時は近づけり。乃ち人の子は罪人等の手に付さるるなり。七。起きよ、いざ往く。

八。見よ、我を付す者近づけり。九。かくて何程彼の許たりておはししとき、祭司長等及び民の長老等より「來れり」。十。また彼を付しつありし者、合圍を彼等に與へて、云ひけるは、我が接吻する者は彼なり、それを握へよ。十一。乃ち直に彼はイエスの許に進み來りて「ハ、ラビ、廢し。かくて幾度も接吻を握へよ。十二。見よ、時は近づけり。乃ち人の子は罪人等の手に付さるるなり。十三。起きよ、いざ往く。

十四。見よ、我を付す者近づけり。十五。かくて何程彼の許たりておはししとき、祭司長等及び民の長老等より「來れり」。十六。また彼を付しつありし者、合圍を彼等に與へて、云ひけるは、我が接吻する者は彼なり、それを握へよ。十七。乃ち直に彼はイエスの許に進み來りて「ハ、ラビ、廢し。かくて幾度も接吻を握へよ。十八。見よ、時は近づけり。乃ち人の子は罪人等の手に付さるるなり。十九。起きよ、いざ往く。

二十。見よ、我を付す者近づけり。二十一。かくて何程彼の許たりておはししとき、祭司長等及び民の長老等より「來れり」。二十二。また彼を付しつありし者、合圍を彼等に與へて、云ひけるは、我が接吻する者は彼なり、それを握へよ。二十三。乃ち直に彼はイエスの許に進み來りて「ハ、ラビ、廢し。かくて幾度も接吻を握へよ。二十四。見よ、時は近づけり。乃ち人の子は罪人等の手に付さるるなり。二十五。起きよ、いざ往く。

二十六。見よ、我を付す者近づけり。二十七。かくて何程彼の許たりておはししとき、祭司長等及び民の長老等より「來れり」。二十八。また彼を付しつありし者、合圍を彼等に與へて、云ひけるは、我が接吻する者は彼なり、それを握へよ。二十九。乃ち直に彼はイエスの許に進み來りて「ハ、ラビ、廢し。かくて幾度も接吻を握へよ。三十。見よ、時は近づけり。乃ち人の子は罪人等の手に付さるるなり。三十一。起きよ、いざ往く。

等みな彼を差しおきて連れたり。

五。かくてイエスを拘へたる人々は、聖者等と長老等との集まりし、祭司長カヤパの許に彼を連れ往けり。五。またペテロは祭司長の中庭まで、遣くより彼に従へり。かくて内に入り來りて、彼はこの終を見んとて使丁等のうちに坐せり。五。また祭司長等と長老等即ち各議會は、これを死罪に處さんために、イエスに逆らひて偽の證を索めたり。六。されど何を見出ださざりき。また多くの偽の證人等も進み來りたれど、何をも見出ださざりき。六。然るに最後に三人の偽の證人進み來りて、此の者はわれ御の聖所を毀ち、且つこれを三日にて建つることを誓と述べたり。七。かくて祭司長立ちて彼にいへり、汝は何をも答へざる



か。此等の者の汝に連れらひて隠するは何ぞや。三されどイエスは黙し給ひき。されば祭司長

等は力の右手にて坐し、且つ天の雲に乗りて来る人の子を自のあたり見るべし。六五そのとき

答へて彼にいへり、汝はキリスト、神の子なるや否やを我等にいはんことを、われ生ける神に

答へて汝に命ず。六四イエス彼に云ひ給ふ、汝はいへり。尙ほわれ汝に云はん、今より後、汝

積ひて汝に命ず。六三イエス彼に云ひ給ふ、汝はいへり。尙ほわれ汝に云はん、今より後、汝

答へて彼にいへり、汝はキリスト、神の子なるや否やを我等にいはんことを、われ生ける神に

答へて汝に命ず。六二イエス彼に云ひ給ふ、汝はいへり。尙ほわれ汝に云はん、今より後、汝

積ひて汝に命ず。六一イエス彼に云ひ給ふ、汝はいへり。尙ほわれ汝に云はん、今より後、汝

答へて彼にいへり、汝はキリスト、神の子なるや否やを我等にいはんことを、われ生ける神に

答へて汝に命ず。六〇イエス彼に云ひ給ふ、汝はいへり。尙ほわれ汝に云はん、今より後、汝

積ひて汝に命ず。五九イエス彼に云ひ給ふ、汝はいへり。尙ほわれ汝に云はん、今より後、汝

答へて彼にいへり、汝はキリスト、神の子なるや否やを我等にいはんことを、われ生ける神に

答へて汝に命ず。五八イエス彼に云ひ給ふ、汝はいへり。尙ほわれ汝に云はん、今より後、汝

積ひて汝に命ず。五七イエス彼に云ひ給ふ、汝はいへり。尙ほわれ汝に云はん、今より後、汝

答へて彼にいへり、汝はキリスト、神の子なるや否やを我等にいはんことを、われ生ける神に

答へて汝に命ず。五六イエス彼に云ひ給ふ、汝はいへり。尙ほわれ汝に云はん、今より後、汝

積ひて汝に命ず。五五イエス彼に云ひ給ふ、汝はいへり。尙ほわれ汝に云はん、今より後、汝

答へて彼にいへり、汝はキリスト、神の子なるや否やを我等にいはんことを、われ生ける神に

答へて汝に命ず。五四イエス彼に云ひ給ふ、汝はいへり。尙ほわれ汝に云はん、今より後、汝

積ひて汝に命ず。五三イエス彼に云ひ給ふ、汝はいへり。尙ほわれ汝に云はん、今より後、汝

答へて彼にいへり、汝はキリスト、神の子なるや否やを我等にいはんことを、われ生ける神に

答へて汝に命ず。五二イエス彼に云ひ給ふ、汝はいへり。尙ほわれ汝に云はん、今より後、汝

積ひて汝に命ず。五一イエス彼に云ひ給ふ、汝はいへり。尙ほわれ汝に云はん、今より後、汝

答へて彼にいへり、汝はキリスト、神の子なるや否やを我等にいはんことを、われ生ける神に

答へて汝に命ず。五〇イエス彼に云ひ給ふ、汝はいへり。尙ほわれ汝に云はん、今より後、汝

積ひて汝に命ず。四九イエス彼に云ひ給ふ、汝はいへり。尙ほわれ汝に云はん、今より後、汝

答へて彼にいへり、汝はキリスト、神の子なるや否やを我等にいはんことを、われ生ける神に

答へて汝に命ず。四八イエス彼に云ひ給ふ、汝はいへり。尙ほわれ汝に云はん、今より後、汝

積ひて汝に命ず。四七イエス彼に云ひ給ふ、汝はいへり。尙ほわれ汝に云はん、今より後、汝

答へて彼にいへり、汝はキリスト、神の子なるや否やを我等にいはんことを、われ生ける神に

第二十七章

で来りていたく泣けり。

かくて夜明になりしとき、すべての祭司長等及び民の長老等これを死罪

に處せんために、イエスに逆らひて協議を開けり。二かくて彼を縛りて

彼等は連れ行き、大守なるポンテオピラトに付せり。

三そのときユダ、彼を付せし者、その罪に定められ給ひしを見て悔ひ、銀三十を祭司長等と

長老等とに返して、四云ひけるは、我は償なき者の血を付して罪を犯したり。然るに彼等いへ

り、我等に對して何ぞや。汝自のあたり見るべし。五乃ち彼は銀子を神殿に投げ込みて退き、

且つ去つて隠れたり。六然るに祭司長等その銀子を取りていへり、これ血の價なれば、これを

彈射所に入るは律しからず。七かくて協議を開きて庶人の墓掘にせんとて、これをもて陶工

の墓を買へり。八かゝるが故にかの墓は今日に至るまで、血の墓と呼ばれたり。九そのとき豫言

者エシメヤによりて謂はれしことを成就せられたり、云ひけるは、かくて我はオスマエルの子

等に償つもられし者たる、償つもられし者の價、銀三十を取りて、二主の擯圖し給ひし如

く、陶工の墓の代にこれを與へぬ。

一かくてイエスは太守の前に立ち給へり。されば太守問ふて、云ひけるは、汝はエダヤ人

の王なるや。乃ちイエス逆へ給ひけるは、汝は云ふ。二然るに祭司長等及び長老等より黙へ

られ給ひしとき、彼は何をも答へ給はざりき。三そのときピラト彼に云ふ、汝は彼等が如

に多くの事を汝に知らしめて置くか。四 されど彼は一と罰をもとれに答へ給はざりき。されば甚く太守を驚かせり。

一五 また太守は彼等に當りて群衆のために、その欲する囚人を一人に擲すの例ありき。一六

そのときバラバと云ふ名高き囚人ありき。一七 是の故に彼等の擲まりしとき、ヒラトこれに

いへり、汝等は誰を汝等に我が擲さんことを欲するや。バラバをか、或ひはキリストと云はる

るイエスをか。一八 是は彼は眞のゆへに彼等は彼を付したることを知りたればなり。一九 また

彼の彼の座に坐せしとき、その連一人を遣はして、云ひけるは、汝にまたかの義しき一人

に何もあらざれ。そはわれ今日汝に彼のゆへに、多くの苦を受けたればなり。二〇 然るに祭

司長等と長老等とは諸群衆を勧めて、バラバを釋してイエスを亡ぼさんことを求めしめた

り。二一 乃ち太守答へて彼等にいへり、汝等は二人のうち孰れを汝等に我が擲さんことを

欲するや。乃ち彼等いへり、バラバを。二三 ヒラト云ふ、是の故にキリストと云はるイエス

をわれ如何に爲すべしや。彼等みな云ふ、十字架につけられしめよ。二三 乃ち太守遣へける

は、然らば何の惡しきことを彼は爲ししや。されど彼等皆々叫び出でて、云ひけるは、十

字架につけられしめよ。二四 かくてヒラトは何ものも盆なきのみならず、反つて鞭の發らんと

するを見れば、水を取りて群衆の前にて手を洗ひ、云ひけるは、此の義しき一人の血につ

きて我は愆なし、汝等目のあたり見よ。二五 乃ち民みな答へていへり、彼の血は我等の上に、

また我等の兒等の上に。二六 そのとき彼はバラバを彼等に釋したり。されどイエスをは纏めて

〔後〕十字架につけられ給ふために付せり。

二七 そのとき太守の兵卒等イエスを廳に連れ行き、彼に連れらひて群衆を集めたり。二八 かく

て彼等は彼を刺して緋色の袍を纏はしめ、二九 また茨にて冠を編みて、これを彼の頭にかむら

しめ、またその右手に莖をもたしめたり。かくてその前に跪き嘲弄して、云ひけるは、辱し、

ユダヤ人の王。三〇 また彼等は彼に唾しつ、莖を取りてその頭を打ちつ。三一 また彼等は彼

を嘲弄せしとき、その袍を御せ取りて曰が衣を齊せたり。かくて十字架につくるために、彼を

連れ往けり。三二 また彼等は川で來りしとき、クレネ人名はシモンを見出だし、彼の十字架を

負ふやう此の者を強ひたり。

三三 かくて憫憐の場所と云はる、ユルゴタと云ふ所にまで到りて、三四 苦味を和ぜたる胡

萄酒を彼に飲ましめたり。されど彼は併めて飲むことを欲し給はざりき。三五 かくて彼を十字

架につけし〔後〕、彼等は臙を取りて彼の衣を頒てり。是れ、彼等は己自らのために我が衣を頒

ち、また我が下衣のために臙を取る、と豫言者より謂はれしことの成就せらるるためなりしな

り。三六 かくてそこに坐して彼等は彼を護りたり。三七 また、此の者はイエス、ユダヤ人の王

なり、とその臙を擽きてその頭の上に置けり。三八 そのとき二人の惡盜、一は右手にて、

また一は左手にて彼と向に十字架につけらる。

三九 また傍を往く人々彼を驚かし、その頭を動かし、四〇 且つ云ひけるは、聖所を毀ち且つ三日に建つる者よ、汝自身を救へ、汝もし神の子ならば十字架より下りよ。四一 また祭司長等も等しく學者等及び長老等と共に嘲弄して云へり、四二 彼は何を救へり、己自らを救ふこと能はず、彼もしイエスエルの王ならば、今十字架より下るべし、されば我等彼を信せん。四三 彼は神に依り頼めり、彼もし好まし給はば、今これを救はしめよ。そは彼、我は神の子なり、と云ひたればなり。四四 また彼と同一に十字架につけられたる隠匿どもも同じきことをもて誇れり。四五 また第六時より第九時まで、すて地の土暗くなれり。四六 また第九時の頃イエスは、エリ、エリ、ラエ、サブクタニ、と云ひつつ大聲にて叫び出で給へり、即ち、我が神、我が神、何と我を見捨て給ひしや、となり。四七 さればそこに立てる者のうちの或る者聞きて云へり、此の者はエリヤを呼ぶと、四八 また彼等のうちの一人、直に走りて行き、海綿を取りて酔を濡らし、且つこれを兼につけて彼に飲ましめたり。四九 然るにその餘の人々云へり、差しおけ、エリヤ來りて彼を救ふや否や、我等をして見せしめよ。

五〇 かくて復たイエスの大なる聲にて叫び給ひしとき、その靈離れたり。

五一 また見よ、聖所の礎は上より下りまで二つに裂け、また地は揺り、また岩は裂けたり。五二 また墓は開きて、眼に就きたる聖者等の多くの體起きたり。五三 かくて彼の起き給ひし後、墓より出で來りて聖なる市に入り來り、且つ多くの者に現はれたり。

五四 また百人長及び彼と共にイエスを護りたる人々は、地獄と穢りし所とを見て一方ならず懼れたり、云ひけるは、眞に神の子にて此の「人」はおほしき。

五五 またそこに多くの婦たち遠くより看つありき。彼等はイエスに浴へつつガリラヤより彼に従ひ「來り」し者なりき。五六 そのうちにツグダラのツリア、またヤコブとヨセの母なるツリア、またゼベダイの子等の母ありき。

五七 かくて夕になりしとき、アリマタヤより富める人來り、名はヨセフ。彼もイエスに弟子たりし者なりき。五八 此の者ツラトの許に遣み來り、イエスの體を求めたり。そのときツラト命じてその體を興へしむ。五九 乃ちヨセフは體を取りて、淨き麻布にてこれを巻けり。六〇 かくて岩に鑿りたる己が新しき墓のうちにてこれを置けり。また大なる石をその墓の入り口に轉はして去れり。六一 またそこにツグダラのツリアと他のツリアとありて、墓の對に坐したりき。六二 また備日の後なる明くる日に、祭司長等とパリサイの人々とはツラトの許に集まりて、六三 云ひけるは、主よ、かの惡は守者の尙ほ生けるとき、三日の後に我は起く、と云ひしことを我等憶ひ出でたり。六四 是の故に命じて三日めまで、墓を確にせしめよ、然らざれば、彼を我等導り夜に乘じてこれを盜み去り且つ、彼は死人のうちより起き給へり、と民にいはん。されば後の惡は先よりも尙ほ惡しかるべし。六五 乃ちツラト逃へけるは汝等番兵あり、往け、汝等の知るままに確にせよ。六六 乃ち彼等往きて石を封じ、番兵をして墓を確にせしめたり。

第二十八章

かくて安息日の終り、週の首(日)に向ひて禱(いたづら)めかりしとき、ツタイのツリアと他のツリアとは慕(うらや)みを感じて到(いた)り。ニまた見よ、大なる地震(おほいなるちか)れり。そは主(き)の使(つかさど)り、天(あま)より降り降りて淵(うみ)に降り、且つその上に坐(ま)したればなり。ニまたその衣(き)は雪(ゆき)の如(ごと)く白(しろ)し。ニまた其(その)の權(けん)より、覆(おほ)れる者(もの)ども震(ふる)き、且つ死人(にが)の如(ごと)くなれり。ニ然(しか)るに天(あま)使(つかさど)りて婦(め)等(ら)にいへり、汝(なんぢ)等(ら)は懼(おそ)る勿(な)れ。そはわ汝(なんぢ)等の十字架(ごうじか)につけられ給(たま)ひしイエスを案(あん)むることを知(し)ればなり。ニ彼は出(い)で居(ゐ)るが故(ゆゑ)に、そは彼の目(め)ひし如(ごと)く起(た)ち給(たま)ひたればなり。いざ來(こ)れ、主(き)の置(お)かれ給(たま)ひし場所(ばしょ)を見(み)よ。ニ且つ速(すみ)に往(い)きて、死人(にが)のうちより彼の起(た)ち給(たま)ひしことをその弟子(でし)等(ら)にいへ。また見(み)よ、彼は汝(なんぢ)等に先(ま)立ちてガリラヤに往(い)き給(たま)ふ。彼(かれ)處(ところ)にて汝(なんぢ)等は彼(かれ)を目(め)のありたり見(み)るべし。見(み)よ、わ汝(なんぢ)等にいへり。ニ乃(すなは)ち大(おほ)なる懼(おそ)れと喜(よろこ)びをもて速(すみ)に還(かへ)り出(い)で來(こ)りて、弟子(でし)等(ら)に報(こた)へんとて彼(かれ)等(ら)は走(は)れり。ニかくて彼(かれ)等(ら)は弟子(でし)等(ら)に報(こた)へんとて往(い)きつづありしとき、また見(み)よ、イエス彼(かれ)等に往(い)き逃(に)げて、云(い)ひ給(たま)ひけるは、履(は)き、乃(すなは)ち彼(かれ)等(ら)進(すす)み來(こ)りその足(あし)を拘(と)へたり、且つ彼(かれ)に平(へい)伏(ふく)せり。ニそのときイエス彼(かれ)等に云(い)ひ給(たま)ふ、懼(おそ)る勿(な)れ、往(い)け。我が兄弟(あな)等(ら)にガリラヤに往(い)け、と告(つ)げよ。されば彼(かれ)等(ら)は彼(かれ)處(ところ)にて我(われ)を目(め)のありたり見(み)るべし。

地(ち)震(おほいなるちか)れり。そは主(き)の使(つかさど)り、天(あま)より降り降りて淵(うみ)に降り、且つその上に坐(ま)したればなり。ニまたその衣(き)は雪(ゆき)の如(ごと)く白(しろ)し。ニまた其(その)の權(けん)より、覆(おほ)れる者(もの)ども震(ふる)き、且つ死人(にが)の如(ごと)くなれり。ニ然(しか)るに天(あま)使(つかさど)りて婦(め)等(ら)にいへり、汝(なんぢ)等(ら)は懼(おそ)る勿(な)れ。そはわ汝(なんぢ)等の十字架(ごうじか)につけられ給(たま)ひしイエスを案(あん)むることを知(し)ればなり。ニ彼は出(い)で居(ゐ)るが故(ゆゑ)に、そは彼の目(め)ひし如(ごと)く起(た)ち給(たま)ひたればなり。いざ來(こ)れ、主(き)の置(お)かれ給(たま)ひし場所(ばしょ)を見(み)よ。ニ且つ速(すみ)に往(い)きて、死人(にが)のうちより彼の起(た)ち給(たま)ひしことをその弟子(でし)等(ら)にいへ。また見(み)よ、彼は汝(なんぢ)等に先(ま)立ちてガリラヤに往(い)き給(たま)ふ。彼(かれ)處(ところ)にて汝(なんぢ)等は彼(かれ)を目(め)のありたり見(み)るべし。見(み)よ、わ汝(なんぢ)等にいへり。ニ乃(すなは)ち大(おほ)なる懼(おそ)れと喜(よろこ)びをもて速(すみ)に還(かへ)り出(い)で來(こ)りて、弟子(でし)等(ら)に報(こた)へんとて彼(かれ)等(ら)は走(は)れり。ニかくて彼(かれ)等(ら)は弟子(でし)等(ら)に報(こた)へんとて往(い)きつづありしとき、また見(み)よ、イエス彼(かれ)等に往(い)き逃(に)げて、云(い)ひ給(たま)ひけるは、履(は)き、乃(すなは)ち彼(かれ)等(ら)進(すす)み來(こ)りその足(あし)を拘(と)へたり、且つ彼(かれ)に平(へい)伏(ふく)せり。ニそのときイエス彼(かれ)等に云(い)ひ給(たま)ふ、懼(おそ)る勿(な)れ、往(い)け。我が兄弟(あな)等(ら)にガリラヤに往(い)け、と告(つ)げよ。されば彼(かれ)等(ら)は彼(かれ)處(ところ)にて我(われ)を目(め)のありたり見(み)るべし。

銀(ぎん)子を兵(へい)卒(そ)等(ら)に與(たま)へて、三(さん)云(い)ひけるは、我(われ)等(ら)の眠(ね)むるとき、彼(かれ)の弟子(でし)等(ら)來(こ)り夜(よ)に乘(の)りて彼(かれ)等(ら)を蓋(おほ)みたり、といへ。ニ又(また)此(こ)の事(こと)もし太守(たうしゆ)に聞(き)えなば、我(われ)等(ら)彼(かれ)等(ら)を説(と)き辯(べん)めん。かくて汝(なんぢ)等(ら)を心(こころ)遣(つか)ひなからしむべし。ニ乃(すなは)ち彼(かれ)等(ら)は銀(ぎん)子(ご)を取(と)りて教(おし)へられたる如(ごと)く信(しん)じたり。されば此(こ)の言(ことば)今日(こんにち)に至(いた)るまでユダヤ人に聽(き)かされて云(い)ひ觸(ふ)らざるなり。

ニかくて十一(じゅういち)の弟子(でし)等(ら)はガリラヤに、イエスの彼(かれ)等に指(さ)し示(し)給(たま)ひし山(やま)に往(い)けり。ニ七(なな)また彼(かれ)等(ら)は彼(かれ)等(ら)を見て平(へい)伏(ふく)したり。されど或(ある)人(ひと)々(々)は疑(うたが)へり。ニかくてイエス進(すす)み來(こ)りて彼(かれ)等に話(かた)りて、云(い)ひ給(たま)ひけるは、天(あま)のうちまた地(ち)の上(うへ)のすべての權(けん)は我(われ)に與(たま)へられたり。ニ是(こゝ)の故(ゆゑ)に往(い)きてすべての國(くに)人を弟(あな)子(ご)とし、父(ちち)と子(こ)と聖(せい)靈(れい)の名(な)に入れてこれをバプテスマし、ニ我(われ)の汝(なんぢ)等に命(いのち)ぜしすべての事(こと)を聽(き)るや、汝(なんぢ)等(ら)を教(おし)へよ。また見(み)よ、我(われ)は世(よ)の完(かん)成(せい)まですべての日(ひ)、汝(なんぢ)等(ら)のうち在(あ)り。アメン。

ツタイ傳聖福音 終り

第一章

神の子、イエスキリストの福音の初。三豫言者等のうちに、見え、われ汝の顔に先んじて我が使をばさん、彼は汝の道を汝の前に備ふべし。三荒野に於ける叫びの聲「あり、主の道を備へよ、その遺跡を直ぐ爲せ」と諭されたる如く、四ヨハネ荒野にてバプテスマしつ、即ち罪の故に至る悔ひ改のバプテスマを宣へつ、現はれたり。五さははエダサのすべの地方、また多くのエロホルム人等、彼の許に出で往きて、みなその罪を告白しつ、ヨルダン河にて彼よりバプテスマせられたり。六またヨハネは駱駝の毛を薙ぎ、

は、我より力ある者、我が後づに來り給ふ、我は屈みてその鞋の紐を釋くにも足らざる者なり。八我は如何にも水にて汝等をバプテスマせり。されど彼は靈にて汝等をバプテスマし給ふべし。九またそれらの日にかくありき、イエスは方リサヤのナザレより到り給へり。かくてヨルダンに入れてヨハネよりバプテスマせられ給へり。一〇かくて直に水より上り給ひしき、彼は、天を裂き、且つ己の上に靈の、鴿の如く降り給ふを見給へり。一また聲、天より出でたり、汝は我が子、愛せらるる者なり、彼に於てわれ悦を得たり。二また聲に靈は彼を

荒野にまで逐ひ出だせ給ふ。三かくて彼は四十日荒野に在りて、サタナより試みられ給ひ、且つもろの歌のうちに知らせしき。また天使等彼に事へたり。

一四またヨハネの持されし後、イエスは神の國の福音を宣へつ、ガリラヤに到り給へり、

一五云ひ給ひけるは、期は満てり、また神の國は近づけり。悔む改め、且つ福音を信ぜよと。

一六また彼はガリラヤの海の邊を歩つ、海に投網を扱ぐるシモンとその兄弟なるアンデレとを見たまへり。そは彼等は漁り人なりければなり。一七乃ちイエス彼等に曰へり、我に跟ひ來れ、さればわれ汝等を人の漁り人にならしむべし。一八乃ち直に網を差しおきて、彼等は彼に從へり。一九また彼はそより少しく進み行き、ゼベダイの二子、ヤコブとその兄弟なるヨハネとを、即ち船にて網を繕ふ彼等を見給へり。二〇乃ち直に彼等を召し給へり。されば彼等は急ぎ、その雇人と共に差しおきて、彼に跟き去れり。

二一かくて彼等はカペナウムに入り往く。また直に彼は安息日に會堂に入り來りて教へ給へり。三また人々その教に驚かされき。そは彼等を教へ給ふに、權ある者の如くにて、學者等の如くに知らせざりければなり。三またその會堂に不浄なる靈に憑かれたる人ありて、叫び出でたり、言云ひけるは、ああ、サザレ人イエスと、我等にまた汝に何ぞや。汝は我等を亡ぼさんとて到り給ふや。われ汝の誰におほすかを知ら、神の聖なる者におほします。三自然にイエスこれを叱して、云ひ給ひけるは、噤め、且つ彼より出で來れ。二乃ち不浄なる靈

は彼を驚せしめ、且つ大聲に叫びて出で來れり。三もさればみな驚かされて、己自らに對ひ論じて、云ひけるは、此は何ぞや、此の新しき教は何ぞや、權をもて不浄なる靈にきへ彼命ずれば、則ちこれに聞き從はんとは、三乃ち直に彼の風聞は、遍くガリラヤの四方の村々に出で來れり。

二乃ちまた會堂より出で來りて、直に彼はヤコブ及びヨハネと共に、シモンとアンデレとの家に到り給へり。三然るにシモンの姉、蘇病にて臥しをれり、されば人々直にこれを彼に云へり。三乃ち進み行き、彼はその手を掲げて彼を起し給へり、されば蘇病直に彼をなしたるに感かれたる者を、すべて彼の許に連れ來れり。三かくて市驛りて入り口に集まれり。三四

されば彼は憐々の疾にて憐ある多くの者を癒し、また多くの惡魔を逐ひ出だし給へり。かくて惡魔の託ることを許し給はざりき、そは彼を知りたればなり。

三五また夜明に甚く暗かりし頃、彼は起きて出で來り給へり。かくて癒しき場處に去り、そこに祈りておほしき。三六然るにシモン及び彼と共に居る人々、彼を追い求めたり。三七かくて彼を見出だして云ふ、すべての者汝を慕むと。三八然るに彼等に云ひ給ふ、いざ隣國の處々にも往くべし。これ我が彼處にても宣ぶるためなり、そはこれがために我は出で來りたればなり。三九かくて彼は遍くガリラヤのうちに及彼等の會堂にて宣へ、また惡魔を逐ひ出だしつ

おはしき。  
 八 また一人の癩病者彼の許に來り、彼に乞ひ、且つ躡つきて彼に云ひけるは、汝もし好よとし給はば、我を淨きむることを能よくし給ふと。一 さればイエス不便ふべんに思おもひ給ひて、手を伸のぶ、總すべと、誰にも何をなにもいふ勿なれ。されど往ゆけ、汝自身を祭壇まつだいに見みはせ、且つ汝の淨きまりしことことに就あきて彼等に證あかしするのために、モラゼの誓ちかひ付けしものを獻けんげよ。五 然しかるに彼は出いで來きりて、實まことを天あまに宣のたまへ、また言ことひ觸ふらし始めたり。それゆへ彼はもはや斯ごとくに來きり給たまふことことを得えざりき。されど外の疲つかしき場ば處ところにおはせり、されば人々四方より彼の許もとに來きりたり。  
 また數日を経て、復またび彼はカエナウムに入り來きり給たまへり、かくてその家におかはすこと聞きえたり。二 されば直ただに多くの者押おし集あまりて、もはや入り口にささへ、隙ひま間まなき程ほどなりき。乃しかち彼は言ことをこれに語かたたり給たまへり。三 かくて彼の許もとに、四人にてこゝ、隙ひま間まなき程ほどなりき。乃しかち彼は言ことをこれに語かたたり給たまへり。四 然しかるに癩病者れいびやうしやのゆへに彼に近ちかづくこと相あはざりき、ささぐはれたる、中風の者を擲なげて來きり。五 然しかるに癩病者れいびやうしやの風かぜしたる味あじを嗅かり下くだりせり。六 乃しかちイエス彼等の信仰しんぎやうを見て、中風の者に云いひ給たまふ、兒こよ、汝の罪は汝に赦ゆるされたり。六 然しかるに癩病者等のうちうちの或ある者ものそこに坐ましてありき。かくてその心のうちに勘かん考こうしけるは、七 此の者は何故にか

く言ことを語かたたるや。一、即すなはち神の外ほかに、誰たれか罪を赦ゆるすことを得えるか。八 然しかるに直ただにイエスそのこゝに於おいて、彼等は己おのれらのうちにかく勘かん考こうすることを罪つとまかに知りて、彼等に曰いへり、何故に汝等はその心のうちに此等の罪を勘かん考こうするや。九 中風の者に、罪は汝に赦ゆるされたり、といふことと、或あるは、起たげよ、汝の床を取り上げよ、且つ歩あめ、といふことと執とれ易やすきや。一〇 されど人の子は地ちにて罪を赦ゆるすの權けんあることを汝等の知るために、十一 中風の者に云いひ給たまふ、十二 われ汝に云いふ、起たげて汝の床を取り上げよ、且つ汝の家うちに往ゆけ。三 乃しかち彼は直ただに起たげたり、かくて予われての者の前まへにて、床を取り上げて出いで來きりたり、さればみな驚おどかさざりき。かくて神を頌ほめて云いひけるは、曾までかかる〔事こと〕を我等は見みしことなしと。  
 三 また彼は復またび海の邊べに出いで來きり給たまへり、されば群衆ぐんしゆみなその許もとに來きりたり、乃しかち彼等を數かずへ給たまへり。四 また彼は途みちから、關稅所かんぜいじよに坐まするアルバイの〔子こ〕レドを見給たまへり。かくて彼に云いひ給たまふ、我われに從したがへ。乃しかち起たちて彼に從したがへり。五 かくて彼の家うちにて彼の席せきに敷かき給たまへり、且つ彼に從したがひたればなり。六 然しかるに聖せい者しや等ら及びパリサイの人々、關稅人かんぜいじんまた罪人つとまらんとしときかくありき、即すなはち關稅人かんぜいじんまた罪人つとまら、イエス及びその弟子等でしと同一どういつに席せきに敷かけり、是これは彼等らと共に食たべ給たまふ彼を見て、弟子等でし等に云いへり、關稅人かんぜいじんまた罪人つとまらどもと共に、彼の食たべし且つ飲のみむは何故なにぞや。一七 乃しかちイエス聞ききて彼等に云いひ給たまふ、丈夫ぢゆうぶなる者は醫い士の輩たぐひあらず、されど癩病者れいびやうしやある者は〔その罪〕あり。我われは義よしき者を召よすために來きるにあらず、されど罪人を悔くひ改あらために召よす

らしめんだめなり。八またヨハネの弟子等とパリサイの人々とは斷食しつゝありき。かくて彼等來りて彼に云ふ、何ずれぞヨハネの弟子とパリサイの人々とは斷食するに、汝の弟子等は斷食さざるや。九乃ちイエス彼等に曰へり、婚姻の席に在る子等は花祭の彼等と共に居るうち斷食することを得んや、花祭の彼等と共にある時の間は斷食することを得ず。三〇されど日は到らん、花祭の彼等より奪ひ去らるるとき、さればそのときに、それらの日に彼等は斷食するならん。三十一また仕立てしことなき切れ地の糶糶を古き衣に纏ふ者はなし。されどもし然らずば、纏ひし新しきは古きを取り去りて、破は何ほ惡しくならん。三十二また新しき葡萄酒を古き皮に入る者はなし。されどもし然らずば、葡萄酒、新しきは皮を破り、また葡萄酒も流れ出づ、かくて皮も廢るべし。されど新しき葡萄酒は新しき皮に入れらるるなり。

三三また安息日に彼は齋齋を経て過ぎ行き給ひしときかくありき、即ち弟子等、糶を揃揃ひなかくて皮も廢るべし。されば人の子はまた安息日のまじなり。

人は安息日のためにあらず。二六されば人の子はまた安息日のまじなり。

人々にも與へしは如何にぞや。二七また彼等に云ひ給へり、安息日は人のために出でたり、人々に、神の家に入り來り、且つ祭司の外に喰ふは律しからざる傳のパンを喰ひ、且つ彼に作へる人の乏しく、且つ領なしとき、爲し事を未だ願願まざるか。二八彼は祭司長アブダルの「曰」からざる事を爲すや。二九乃ち彼は彼等に云ひ給へり、汝等は夕とテが、彼及び彼と共に人々が通通り始めたなり。三〇さればパリサイの人々彼に云へり、且と、何故に彼等は安息日に律しがらざるや。三一また安息日に彼は齋齋を経て過ぎ行き給ひしときかくありき、即ち弟子等、糶を揃揃ひなかくて皮も廢るべし。されど新しき葡萄酒は新しき皮に入れらるるなり。

第三章

また彼は復復ひ會堂に入り來り給へり、また癒へたる手をもつ人ありき。二七されば人々、彼は安息日にこれを癒すならんかと窺へり、是れ彼を訴ふるためなり。三八かくて彼は癒へたる手をもつ人に云ひ給ふ、眞眞中に起てよ。三九また彼等に云ひ給ふ、安息日に善を爲すことは律しきや。或ひは惡を爲すことか、或ひは救ふことか、或ひは殺すことか。然るに彼等は黙したり。四〇乃ち彼は怒をもて彼等を脚脚はし、その心の頑頑たるを哀しみ、かの人に云ひ給ふ、汝の手を伸べよ。乃ち彼は伸べしに、その手は他の手手の如く健に直れり。四一さればパリサイの人々直に田田で來りて、ヘロデ黨の人々と共に、如何にしてこれを亡ぼさんかと、彼に逆らひて協協議を爲せり。

四二またイエス、弟子等と共に海の方へ立ち退き給へり、さればカリライヤの夥夥しき大衆、彼に從へり。またエヂサより、八またエロソルアより、またイドミニヤ并にヨルダンの両側よりの大衆彼に從へり、且つツロとシドンシドンの廻りの夥夥しき大衆も、その爲し給ひし多くの群を聞きて、彼の許に到れり。四三乃ち彼は群衆のゆへに、彼にその押し迫ることなからんために、小船を備ふるやう、弟子等に曰へり。四四そは彼は多くの者を癒し給ひたれば、すべて病者ある者は彼に押し迫りて、押し迫りたればなり。四五また不淨なる靈ども彼を看しとき、その前に伏し叫びて、云へり、汝は神の子におはすと。四六されば彼は已已を頭はさしめぬやう、彼等に甚く激しく命し給へり。四七また彼は山に登り、且つ己の好とし給ふ者を召し給ふ、乃ち彼等





且つ跪えて、實を與へたり、即ち一は三十、また一は六十、また一は百を辨けたり。九また彼等に云ひ給へり、聞くべし。二乃ち彼等に云ひ給ひしとき、その傍に在りし人々、十二と同じに喩を問へり。二乃ち彼等に云ひ給へり、汝等には神の國の義を知ることと與へられたり、されど外なる彼等には、すべての事を喩にてせらる。三是れ視ることとは彼等視ん、されど認めず、また聞くこととは彼等聞かん、されど解せず、彼等は顯れ視ることと、且つその罪を彼等に教えることなからんためなり。三また云ひ給ふ、汝等此の喩を知らざるか、されば如何にしてすべての喩を知るべけんや。四播く者は言を播く。五また此等の者は遠のほとり、そこに言の播かれたる人々なり、即ち彼等聞くとき、直にサタチ來り、且つその心に播かれたる言を取り去るなり。六また此等の者は等しく岩地に播かれたる人々なり、彼等は言を聞くとき、直に喜をもて受く、モされど己自らに根をもたず、唯暫しのみ、言のゆへに穀、或ひは追害の發るときは、直に踏かさるなり。七また此等の者は笑のうちに播かれたる人々なり、此等の者は置を聞けども、一九此の世の心迷と、富の惑と、その他、入り来るさまざまの慾とは言を蓋きて、秘り長からずなる人々なり。二〇また此等の者は良き地に播かれたる人々なり、彼等は言を聞き、且つ受け、かくて一は三十、また一は六十、また一は百の實を結ぶところの者なり。二一また云ひ給へり、燈火は樹の下、或ひは床の下に置かるために来るや、燈火案の上に置かるためならずや。三それは顯はざるためなり

らで、隠るものはなく、また秘め事の生ずるは、光に來るために外ならざればなり。三もし誰にても聞くべし耳をもたば、聞くべし。二四また彼等に云ひ給へり、汝等聞く事を視よ。汝等の聲るところの聲にて撒らるべし、且つ聞きたる汝等には増し加へらるべし。二五それは誰にても、有つ者は與へらるべし、また有らぬ者は彼より、その有てるものをも取るべければなり。二六また云ひ給へり、かく神の國は人、地に種を播くが如きものなり。二七即ち人の一夜は寝ね、晝は起きて、彼の知らざるうちに、種は生えまた伸ぶ。二八それは地はおのづから實を結ばばなり、即ち最初には苗、つぎに穂、つぎに種、つぎには穂のうちに穀を満たさん。二九かくて實の熟するときは、直に彼は鎌を使はさん、それは種り入來りたるが故なり。三〇また云ひ給へり、我等は神の國を何に等しうすべきや。或ひは如何なる喩にこれを比すべきや。三一文字粒の如し。此は地に播かるときは、地に在る萬の種より小きし。三二されどその播かれたるときは、實ち、且つ萬の野菜より大きくなり、また大なる枝を出さん、されば空の鳥その蔭に宿り得るなり。三三また彼は多くのかくの如き喩にて、彼等の聞き得るに御ひて、言を彼等に語たり給へり。三四されど喩を離れては彼等に語たり給はざりき。かくて人を避け、弟子等にすべての事を解き給ひき。三五またその日の夕になりしとき、彼は彼等に云ひ給ふ、いざ向側に越え往かん。三六乃ち彼等は群衆を差しおきて、船におはす彼をそのままに伊へり。また他の小舟も共に在

ましかくて大なる暴風發りたれば、彼は船に打ち入りて既に游る程なりき。六 然るに彼は艦にて、枕して寝ねておはせり。されば彼等起して云ふ、船よ我等の亡ぶること汝に必懸りし給はざるや。三 乃ち彼は起きて風を叱し、且つ海に對ひて曰へり、歇せよ、釋まれ。乃ち風落して大なる風となれり。四 かくて彼等に曰へり、何ぞかく墜するや。如何にして信仰なきや。一 されば彼等は大に懼れて拂れ、且つ互に云へり、されば此一人は誰におはすぞや、風と海とさへ彼に聞き従はんとは。

第五章

かくて彼等は海の向側に、ガダラの地に到れり。二 然るに船より彼の出で來り給ひしとき、直に不淨なる靈に憑かれたる人、墓より出でて、彼に往き逢へり。三 彼は墓のうちに接房居りて、誰もこれを鑿にてさへ、縛り得るものなかりき。四 是れ彼は腰袋と鑿とにて纏られたれど、鑿は斷ち切られ、また接房碎かれ、誰も彼を縛するこゝ能はざりしゆへなり。五 また彼は夜も目も、絶えず山にてまた墓にて叫び、且つ己自らを石にて傷つけつゝありき。六 然るに遠くよりイエスを見しとき、彼は走り來り、且つ彼に平伏し、セ大聲に叫びていへり、イエスよ、至高き神の子よ、我にまた汝に何ぞや。神によりて汝に願ふ、われを苦責し給ふ勿れ。八 是れ彼はこれに、不淨なる靈よ、此の人より出で來れ、と云ひ給ひたればなり。九 かくて彼はこれに問ひ給へり、汝の名は何ぞ。乃ち答へて云ひけるは、我が名はレキヨン。そは我等多きが故なり。一〇 また彼は此の地方より外に使はし給はざらんことを、しまりに彼に乞へり。二 またそこに豚の大なる群の、山々ほとりにて飼はれつゝありき。三 されば惡鬼ども彼に乞ふて、云ひけるは、我等をかの豚のうちに入り來らんため、そのうちに遊ばし給へ。三 乃ちイエス直に彼等に許し給ひたり。されば不淨なる靈ども、出で來りて豚のうちに入りたれば、群は塵を下りて海に跳び入れり。かくて約そ二千ありしが海に溺れたり。四 然るに豚を飼へる人々遊べ、且つ市にも野にも知らせたり、されば人發りし事の何なるかを見んとて出で來れり。五 かくて彼等はイエスの許に來りて、惡鬼に憑かれたる者レキヨンに憑かれし者々の衣を着け、且つ變なる心にて坐するを看て、懼れたる。六 されば惡鬼に憑かれたる者と豚とにつきて、如何なる事の變りしかを見し人々、具に彼等に陳べたり。七 かくて彼等は巴が境のうちより去り給はんことを彼に乞ひ始めたり。八 又また彼の船に乗り給ひしとき、惡鬼に憑かれたりし者、彼と共にあらんことを乞へり。九

然るにイエス許し給はず、されど彼に云ひ給ふ、汝のもの許に、汝の家に往け、且つ主が如何に大なる事を汝に爲し、また彼が給ひしかを彼等に知らしめよ。三〇 乃ち彼は去れり。かくて彼は如何に大なる事を、イエスの彼に爲し給ひしかを、テカザリスに宣へ始めたり。さればすべての者驚かされき。

二 又またイエスの復び船にて向側に越え往き給ひしとき、大なる群衆彼に押し迫れり、即ち彼は海の邊におはしたり。三 かくて風よ、尊堂長のうちの一人、名はサイロ、來り且つ彼

を見て、その足下に伏す。三かくてしきりに乞ふて云ひけるは、我が小嬢いまだの際なり、來りて彼に手を授き給はんことを、されば彼は救はれて生くべし。二乃ち彼と共に去り給へり、然るに大なる群衆彼に従ひ、且つ押し迫れり。  
 三また減る婦あり、十二年血漏を患ひて、ニ多くの醫士より多くの苦を受け、また己自らにつける物をすべて賣したれど、少しも益なきのみならず、反つて尙ほ悪しくなるのみなりければ、ニイエに就き聞きたれば、群衆のうちに入り、後より彼の衣に觸りたり。六  
 彼は、我もし彼の衣のいつれにか觸らんには、救はるるならん、と云ひたればなり。五  
 乃ち直に血の泉涸れたり。されば彼は病苦より醫されしことを己が體に知れり。三。然るに面にイエスは力の、己より出で來りしことを己自らうちに察かに知り給ひ、群衆のうちには振り返りて、云ひ給へり、我が衣に觸りしは誰か。三乃ち弟子等彼に云へり、汝に押し迫る群衆を汝は視給ふ、然るに汝は、我に觸りしは誰か、と云ひ給ふ。三かくて彼は此「の事」を爲し者を見んとて胸は己の上に覆りし事を知りたれば、懼れて懼きつつ來り、且つ彼の前に伏して、すべて頭を彼にいへり。三乃ち彼曰へり、嬢よ、汝の信仰汝を救へり。平和にまで往け、且つ汝の病苦より「離れて」癒なれ。五彼の尙ほ語たりて知はししとき、人々會堂長の「家」より來りて、云ひけるは、汝の嬢は死ねり、何ぞ尙ほ脚を煩はずやと。三。然るにイエス直に語たれる言を聞きて、會堂長に云ひ給ふ、憚るる勿

第六章

れ、唯信ぜよ。三かくて彼はペテロ、またヤコブ、またヤコブの兄弟なるヨハネの外は、誰をも従ふことを許し給はず。三乃ち彼は會堂長の家に來り給ふ。また彼は「人々」の甚く泣き、且つ哭く聲を給ふ。三かくて彼は入り來りて、彼等に云ひ給ふ、何ぞ騒ぎ且つ泣くや。幼児は死にたるにあらず、されど寢ぬるなり。四乃ち彼等は嘲笑へり。されど彼はすべての者を逐ひ出だし、幼児の父と母と彼と共なる者等とを携へて、幼児の置かれたる所に入り行き給ふ、四かくて幼児の手を握へて、これに云ひ給ふ、タリタ、タミ。即ち譯すれば、小女よ、われ汝に云ふ、起きよ、なり。五乃ち直に小女は起り、且つ歩めり。そは十二歳なりければなり。されば彼等は大なる駭もて驚かされき。六かくて彼は此「の事」を誰にも知らせざる勿れと、くればれも彼等に言ひ含め給ひ、且つ彼「小女」に咬はしむべしと曰へり。  
 また彼はそこより出で來り給へり、かくて己が百里に到り給へり、また弟子等も從へり。二かくて安息日になりしとき、會堂にて彼は教へ始め給へり、されば多くの者聞きて驚かされて、云ひけるは、此等の事は此の者に何處よりぞや。また彼に與へられたるこの智慧は何ぞや。かくの如き力ある行き、その手にてなさるとは。三此の者は「マリヤ」の子にて、ヤコブまたヨセまたエグまたシモンの兄弟なる大工にあらずや。またその姉妹等も此處に我等と偕におらずや。かくて彼等は彼に驚かせられたり。四。然るにイエス彼等に云ひ給へり、驚者は己が百里にて、また親戚にて、また己が家にての外は、敬は

れざることなしと。かくて彼處にては、欺人の精身なる者に手を抜きて癒し給ひしほか、力ある行を何をも偽し給ふこと能はざりき。六されば彼等の不信仰の故に、彼は驚き給へり。かくて彼は数つ村々を廻り往き給ひき。

七また彼は十二を召し、且つ二人づつ使はし給ひ給へり。また不淨なる靈を制する權を彼等に與へ給ひぬ。八また彼は彼等に旅路のために、只一つの杖の外に、錢袋をも、パンをも、帶のうちを纏をも、何をも携ふること勿れ、九されど鞋を結び、二つの下衣を着る勿れ、と命じ給へり。一〇また云ひ給へり、汝等何處にても家に入り來れ、そこより出で來るまでそこに逗留せ。一またたづねの處にても汝等を受けず、また汝等に聞かずば、そこより出で往くと云ひ給へり。二かくて彼等は多くの市のためより尙ほ耐へ易かるべし。三かくて彼等は出で來りて、悔ひ改むべしと宣べたり。三また彼等は多くの惡鬼を逐ひ出だし、また多くの病身なる者にエライオンをぬりて癒したり。

四またヘロデ正(彼につきて)聞けり、そはその名顯になり給ひたればなり。乃ち彼云へり、バプテスマのヨハネ死人のうちより起きたり、されば此のゆへに力ある行、そのうちに働くなりと。五他の者は云へり、エリヤなりと。また他の者は云へり、豫言者、即ち豫言者等の一人の如き(者)なりと。六然るにヘロデ聞きていへり、此の者は我が斃りたるヨハ

ネなり。彼は死人のうちより起きたりと。七そは彼ヘロデは已か兄弟なるヒリポの妻ヘロデヤのゆへに(人)を便はしてヨハネを拘へ、且つこれを檻倉に繋ぎたればなり、とは彼はかの婦人を娶りたるが故なり。八そはヨハネはヘロデに、次の兄弟の妻をもつは汝のために律しからず、と云ひたればなり。九然るにヘロデヤは彼に念みたり、さればこれを殺さんと欲したり、されど能はざりき。一〇そはヘロデはヨハネの、談しき且つ聖なる人なることを知りたればなり。三かくてヘロデ、己が誕生日の好き機の日來りしとき、大官等及び千人長等并にガリラヤの軍立ちたる人々のために、晩餐を催せり。三かくて彼ヘロデヤの娘入り來りて踊りければ、ヘロデまた同席の人々に喜ばれたり。王は小女にいへり、何にても汝の欲するものを我に求めよ、さればわれ汝に與へん。三三また彼は、何にても汝の我に求むるものは、我が國の半までも、われ汝に與へし、と彼に誓ひたり。三四されば彼は出で來りて、その母にいへり、われ何を求むべきか。乃ち彼いへり、バプテスマのヨハネの首を。三五乃ち直に彼は急ぎて王の許に入り來り、求めて云ひけるは、速にバプテスマのヨハネの首を血に載せて、我に與へられんことを欲す。ニ六されば王、いと哀しくなりたれど、誓と同席の人々とのゆへに、彼を斃すことを欲せざりき。三六乃ち直に王は番兵を便はして、その首を持ち來るべく言ひ付けたり。三八乃ち彼は去つて、檻倉にて彼を斃りたり。かくてその首を血に載せて持ち來り

たれば、それを小女に與へたり、また小女はそれを母に與へたり。二三かくて彼の弟子等聞きて到り、且つその屍を取り去りて、これを墓に匿けり。

二三かくて使徒等、イエスの許に集まりて、彼等の爲しことをも、また教へしことをも、すべの亦を彼に報じたり。二三乃ち彼等に曰へり、いざ汝等自ら人を連れて寂しき場所に来り、且つ少しく休め。それは来る者もまた往く者も多くして彼等は噫ふべき好き機さへなかりしが故なり。二三乃ち彼等は人を連れて、船にて寂しき場處に去れり。二三然るに諸群衆、彼等の往くを見且つ多くの者彼を認めたれば、すべての市々より人々を徒歩にてそこに走せ與まれり。

二四乃ちオネス出で來りて、大なる群衆を見給ひ、且つこれを不便に思ひ給へり、それは牧者を有たざる羊の如くありしが故なれば彼等に先立ちて到り、かくて彼の許に集まり來れり。二三乃ちオネス出で來りて、大なる群衆を見給ひ、且つこれを不便に思ひ給へり、それは牧者を有たざる羊の如くありしが故なれば、彼等に仰せて、青草の上に超え、すべての者を席に着かしめ給へり。二四されば彼等は百チナリのパンを置ひて、彼等に喰はしむべきや。二三然るに彼は彼等に云ひ給ふ、汝等は幾つチナリのパンを置ひて、彼等に喰はしむべきや。二三乃ち彼等知りて云ふ、五つと二つの魚とあり。二三乃ち彼は彼等に仰せ給へり、青草の上に超え、すべての者を席に着かしめ給へり。二四されば彼等は

百八、また五十八人づつ、故々への如くしに席に着けり。二四かくて彼は五つのパンと二つの魚とを取りて、天を祝上げ、祝してパンを裂き給へり。かくて人々の前に置かむるために、弟子等に與へ給へり。また彼は二つの魚をすべての者に喰ひ給ひたり。二三乃ちすべての者喰へり、且つ腹かさされたり。二三かくて彼等は「パン」の碎片と、魚の「殘」を拾ひしに十二の手に盈ちたり。二四またパンを喰ひし者は男約五千ありき。二五かくて直に彼は群衆を去らしめ給ふうちに、船に乗り且つ先立ちて向側に、ペテロサイダに往かんとを弟子等に強ひ給へり。二六また人々を去らしめ給ひしとき、彼は漸らんとて山に去り行き給へり。二七

されば夕になりしとき、船は海の真中におりしが、彼は獨にて陸におはしき。二八かくて彼は彼等の漂き態を見給へり。それは風逆らひたればなり。然るに夜の第四時頃、彼は海の上を歩みつつ彼等に對ひて來り、且つ往き過ぎんと欲し給へり。二九されど彼等は海の上を歩み給ふを見て、變化ならんと思ひたり、されば叫び出だせり。三〇それはみな彼を見て驚恐したればなり、乃ち彼は彼等と共に語たり、且つ云ひ給ふ、勇ましかれ、我なり、懼る勿れ。三一かくて船に彼等と偕に乗り給ひければ風落ちたり。されば彼等は己自らのうちに餘りに甚く驚かされ、且つ異しめり。三二それは彼等はパンにて極らざりければなり、そはその心強りてありたればなり。

三三かくて越え往き、彼等はオサラの地に到れり、乃ち船がかりせり。三四然るに彼等の

船より出て来りしとき、直に「人々」彼を認め、<sup>五</sup> 過かかの地方を走り廻りたれば、人々<sup>六</sup> 憐れむ者者を床に載せて、そこに彼の<sup>七</sup> おはすと聞きし所に、<sup>八</sup> 掘び廻り始めたり。<sup>五</sup> 又、まれば村々、或ひは市々、或ひは野、いづこにても彼の入り住き給ふ處は、人々市場に病める者を置きて、その衣の袂にだに、<sup>九</sup> 彼等の<sup>十</sup> 捫らんとををへり。かくて<sup>十一</sup> 捫りし者はみな救はれたり。

第七章

またバテサイの人々と或る聖者等と、<sup>一</sup> エロンルマより到りて、彼の許に聚まりたり。ニかくて<sup>二</sup> 彼等は弟子等のうちの或る者の、<sup>三</sup> 穢れたる手、即ち洗はざる「手」にて、<sup>四</sup> パンを食するを<sup>五</sup> 見て<sup>六</sup> 咎めたり。ニそれはバテサイの人々とすべてのユダヤ人は、長老等の言ひ傳を<sup>七</sup> 掘へて、<sup>八</sup> 指先にて手を洗はざれば<sup>九</sup> 食せざればなり。又、また市場より一掃りたるとき、<sup>十</sup> 彼等は<sup>十一</sup> 已自らをバテサイマヤせざれば<sup>十二</sup> 食せず、且つその<sup>十三</sup> 他杯、また鉢、また床をバテサイするなど、<sup>十四</sup> 彼等が<sup>十五</sup> 受けし多くの<sup>十六</sup> 餅あり。又、まればバテサイの人々と<sup>十七</sup> 聖者等とは彼に問へり、<sup>十八</sup> 何にゆへに<sup>十九</sup> 汝の弟子等は長老等の言ひ傳に<sup>二十</sup> 循ひて歩まず、<sup>二十一</sup> 反つて洗はざる手にパンを食するや。又、然るに<sup>二十二</sup> 彼等へて<sup>二十三</sup> 彼等に曰へり、<sup>二十四</sup> 良くも、<sup>二十五</sup> 我がハは<sup>二十六</sup> 偽善者なる<sup>二十七</sup> 汝等に就きて<sup>二十八</sup> 發言せり、<sup>二十九</sup> 此の民は<sup>三十</sup> 厩にて<sup>三十一</sup> 我を<sup>三十二</sup> 敬ふ、<sup>三十三</sup> されど<sup>三十四</sup> その心は<sup>三十五</sup> 我より<sup>三十六</sup> 遠ざかる。又、また<sup>三十七</sup> 人の<sup>三十八</sup> 儀を<sup>三十九</sup> 敬とし<sup>四十</sup> て<sup>四十一</sup> 敬へつ、<sup>四十二</sup> 徒に<sup>四十三</sup> 我を<sup>四十四</sup> 崇む、と<sup>四十五</sup> 嫌ざるが如し。又、それは<sup>四十六</sup> 汝等は<sup>四十七</sup> 神の<sup>四十八</sup> 誠を<sup>四十九</sup> 差しおきて、<sup>五十</sup> 人の言ひ傳を<sup>五十一</sup> 掘へ、<sup>五十二</sup> 鉢また<sup>五十三</sup> 杯を<sup>五十四</sup> バテサイするなど、<sup>五十五</sup> その他<sup>五十六</sup> かくの如き<sup>五十七</sup> 多くの<sup>五十八</sup> ことを<sup>五十九</sup> 爲せばなり。又、また<sup>六十</sup> 彼等に<sup>六十一</sup> 云ひ給へり、<sup>六十二</sup> 良くも<sup>六十三</sup> 汝等は<sup>六十四</sup> 汝等の言ひ傳を<sup>六十五</sup> 誣らんとために、<sup>六十六</sup> 神の<sup>六十七</sup> 誠を<sup>六十八</sup> 傷害せたり。一〇

それは<sup>一</sup> モナセは<sup>二</sup> 汝の父を<sup>三</sup> 汝の母とを<sup>四</sup> 敬べ、<sup>五</sup> また<sup>六</sup> 父或ひは<sup>七</sup> 母を<sup>八</sup> 惡しざまに<sup>九</sup> いふ者は<sup>十</sup> 死罪にて<sup>十一</sup> 終るべし、といひ<sup>十二</sup> たればなり。ニ然るに<sup>十三</sup> 汝等は<sup>十四</sup> 云ふ、<sup>十五</sup> 人もし<sup>十六</sup> 父或ひは<sup>十七</sup> 母に<sup>十八</sup> 對ひ、<sup>十九</sup> 何にても<sup>二十</sup> 我より<sup>二十一</sup> 汝の<sup>二十二</sup> 益せらるるものは<sup>二十三</sup> コルバン、<sup>二十四</sup> 即ち<sup>二十五</sup> 供へ物なり、<sup>二十六</sup> といはば、<sup>二十七</sup> 二もは<sup>二十八</sup> や何をも<sup>二十九</sup> その<sup>三十</sup> 父或ひは<sup>三十一</sup> 母に<sup>三十二</sup> 爲さすとも、<sup>三十三</sup> 汝等は<sup>三十四</sup> 徳を<sup>三十五</sup> 差しおきて、<sup>三十六</sup> 三汝等の<sup>三十七</sup> 憤へし<sup>三十八</sup> 汝等の言ひ傳にて<sup>三十九</sup> 神の言を<sup>四十</sup> 無効となす。また<sup>四十一</sup> 汝等は<sup>四十二</sup> かくの如き<sup>四十三</sup> 事を<sup>四十四</sup> 爲すこと<sup>四十五</sup> 多し。又、かくて<sup>四十六</sup> 群衆を<sup>四十七</sup> 召して、<sup>四十八</sup> 彼は<sup>四十九</sup> これに<sup>五十</sup> 云ひ給へり、<sup>五十一</sup> 汝等みな<sup>五十二</sup> 我に<sup>五十三</sup> 閉け、<sup>五十四</sup> 且つ<sup>五十五</sup> 憐れ。又、<sup>五十六</sup> 人の<sup>五十七</sup> 外より<sup>五十八</sup> これに入り<sup>五十九</sup> 往きて、<sup>六十</sup> 人を<sup>六十一</sup> 穢し得るものは<sup>六十二</sup> なし。されど<sup>六十三</sup> 人より<sup>六十四</sup> 出で<sup>六十五</sup> 往くところのもの、<sup>六十六</sup> それらは<sup>六十七</sup> 人を<sup>六十八</sup> 穢すものなり。又、もし<sup>六十九</sup> 誰ぞ<sup>七十</sup> 聞くべく<sup>七十一</sup> 耳をも<sup>七十二</sup> たば、<sup>七十三</sup> 聞くべし。又、かくて<sup>七十四</sup> 彼の<sup>七十五</sup> 群衆より<sup>七十六</sup> 離れて<sup>七十七</sup> 家に入り<sup>七十八</sup> 來り給ひしとき、<sup>七十九</sup> 弟子等<sup>八十</sup> の<sup>八十一</sup> 聲に<sup>八十二</sup> 就きて<sup>八十三</sup> 彼に<sup>八十四</sup> 問へり。又、乃ち<sup>八十五</sup> 彼等に<sup>八十六</sup> 云ひ給ふ、<sup>八十七</sup> 汝等も<sup>八十八</sup> かく<sup>八十九</sup> 憐れなきか、<sup>九十</sup> すべて<sup>九十一</sup> 外より<sup>九十二</sup> 人に入り<sup>九十三</sup> 往くところものは、<sup>九十四</sup> 彼を<sup>九十五</sup> 穢すこと<sup>九十六</sup> 能はざること<sup>九十七</sup> 解せざるか。又、それは<sup>九十八</sup> 彼の<sup>九十九</sup> 心に入り<sup>一百</sup> 往かす、<sup>一百一</sup> 唯<sup>一百二</sup> 腹に<sup>一百三</sup> 入り<sup>一百四</sup> 往きて<sup>一百五</sup> 出すて<sup>一百六</sup> の<sup>一百七</sup> 食慾を<sup>一百八</sup> 淨めつつ、<sup>一百九</sup> 腹に出で<sup>一百十</sup> 往くのみなればなり。三〇、また<sup>一百一十一</sup> 云ひ給へり、<sup>一百一十二</sup> 人より<sup>一百一十三</sup> 出で<sup>一百一十四</sup> 往くところのもの、<sup>一百一十五</sup> それらは<sup>一百一十六</sup> 人を<sup>一百一十七</sup> 穢す。三、それは<sup>一百一十八</sup> 内より、<sup>一百一十九</sup> 人の<sup>一百二十</sup> 心より、<sup>一百二十一</sup> 惡しき<sup>一百二十二</sup> 勤考<sup>一百二十三</sup> は<sup>一百二十四</sup> 出で<sup>一百二十五</sup> 往けは<sup>一百二十六</sup> なり、<sup>一百二十七</sup> 即ち<sup>一百二十八</sup> 慾淫、<sup>一百二十九</sup> 淫行、<sup>一百三十</sup> 殺人、<sup>一百三十一</sup> 三<sup>一百三十二</sup> 飭盜、<sup>一百三十三</sup> 嫉心、<sup>一百三十四</sup> 邪惡、<sup>一百三十五</sup> 誦、<sup>一百三十六</sup> 好色、<sup>一百三十七</sup> 惡しき<sup>一百三十八</sup> 眼、<sup>一百三十九</sup> 傲慢、<sup>一百四十</sup> 無智、<sup>一百四十一</sup> 三<sup>一百四十二</sup> すべて<sup>一百四十三</sup> 此等の<sup>一百四十四</sup> 惡しき<sup>一百四十五</sup> 物は<sup>一百四十六</sup> 内より<sup>一百四十七</sup> 出で<sup>一百四十八</sup> 往き、<sup>一百四十九</sup> 且つ<sup>一百五十</sup> 人を<sup>一百五十一</sup> 穢すなり。二四、また<sup>一百五十二</sup> 彼は<sup>一百五十三</sup> そこより<sup>一百五十四</sup> 起ちて、<sup>一百五十五</sup> ツロと<sup>一百五十六</sup> シドンの<sup>一百五十七</sup> 曠に<sup>一百五十八</sup> まで<sup>一百五十九</sup> 去り<sup>一百六十</sup> 給へり。かくて<sup>一百六十一</sup> 家に入り<sup>一百六十二</sup> 來りて、<sup>一百六十三</sup> 誰にも<sup>一百六十四</sup> 知らるることを<sup>一百六十五</sup> 欲し給はざりし。されど<sup>一百六十六</sup> 誰れ<sup>一百六十七</sup> 給ふこと<sup>一百六十八</sup> 能はざりき。二五、それは<sup>一百六十九</sup> 不淨な

る聖に感かれたる小娘をもてる一人の婦、彼に就き聞きて到り、その足下に伏したればなり。ニ、また此の婦はマリシヤ人にしてスロホイニサの族なり。乃ち彼は娘より惡鬼を逐ひ出だし給はんことを彼に請へり。ニ、然るにイエス彼に曰へり、先づ見等を遣かしめよ。それは兒等のパンを取りて、犬に投ぐるは良きことにあらざればなり。ニ、然るに彼答へて彼に云ふ、然り、主よ。それは食卓の下なる小夫も兒等のパン屑を食すればなり。ニ、乃ち彼に曰へり、此の言のゆへに往け、惡鬼は汝の娘より出で去れり。ニ、かくて彼は己が家に去り行きしとき、惡鬼は出で去り、且つ床の上に臥したる娘を見出だせり。

ニ、また彼は復びツロとシブとの境より出で來りて、シブを経てデカボリスの境の眞中を通り、ガリラヤの海に到り給へり。ニ、かくて人々、物言ふこと難き癡者を連れ來りて、手を按き給はんことを乞へり。ニ、されば彼は人を連れて群衆よりこれを携へ去り、指を彼の耳に入れ、またこれに唯してその舌に挿り給へり。ニ、かくて天を祝上げて謝じ、且つこれを縛り、釋けたれば、眞直に語られたり。ニ、かくて彼は誰にもいふ勿れと彼等に言ひ含め給へり。されどこれに言ひ含め給ふほど、たほなほ勝りて彼等はこれを宣へたり。ニ、もされば人々非常に驚かされて云ひけるは、彼はすべてを畏く辱し給へり。彼は癡者をも聞かしめ給ひ、且つ啞者をも語らしめ給ふ。

第八章

それらの日に復た甚だ大なる群衆あり、また彼等は嘔ふべき物をもたざりき。然るにイエス弟子等を召してこれに云ひ給ふ、ニ、われ此の群衆を不便に思ふ。そは彼等は既に三日續きて我と共にあり、且つ嘔ふべき物をもたざればなり。ニ、さればもし食を斷むたるままにて、彼等を己が家に去らしめんには、道にて溺るならん。そはそのうち戒る者は、遠くより來りたればなり。四、乃ち弟子等彼に答へり、誰かいつこよりして此處なる荒野にて、パンをもて此等の者を饜かしむることを得べきやと。ニ、然るに彼等に問ひ給へり、汝等幾つのパンあるや。乃ち彼等いへり、七つ。ニ、かくて彼は群衆に命じて、地の上にて席に着かしめ給へり。また七つのパンを取り、感謝して碎き給へり、かくて人々の前に置くらために、弟子等に與へ給ひたり。されば彼等はこれを群衆の前に置けり。ニ、また小き魚少しありたり、されば彼は祝してこれをも人々の前に置けり。九、乃ち彼等は嘔へり、且つ饜かされたり、かくて彼等は壁片の屑を七籃拾へり。九、また嘔ひし人々、男約そ四千ありき。かくて彼はこれを去らしめ給へり。

一〇、また直に彼は弟子等と共に船に乗りて、ブルマヌの地方に到り給へり。二、然るにパルサイの人々出で來り、且つ彼を試みんとて、天よりの徴を彼より索めつ、これと論じ始めたり。ニ、されば彼はその靈に於て歎じて云ひ給ふ、何んすれぞ此の代は徴を索むるや。誠にわれ汝等に云はん、もし徴を此の代に與へらるべくんば。ニ、かくて彼は彼等を差しおきて、